

**2010 年度
大学のアクティブラーニング調査報告書
(要約版)**

河合塾

— 目 次 —

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【Ⅰ】「大学のアクティブラーニング調査」の目的と背景・・・・・・・・	2
1. 初年次教育調査における問題意識の継承・・・・・・・・	2
2. アクティブラーニングが重視されるべき根拠・・・・・・・・	3
(1) アクティブラーニングの定義・・・・・・・・	3
(2) アクティブラーニングが重視されるに至る歴史的背景・・・・・・・・	4
(3) 現状の社会の特質と教育に要請されること・・・・・・・・	4
(4) アクティブラーニングの必要性・・・・・・・・	5
【Ⅱ】質問紙調査の概要・・・・・・・・	6
1. 質問紙の設計・・・・・・・・	7
2. 採点基準・・・・・・・・	7
3. 回答分析・・・・・・・・	9
(1) 4年間のアクティブラーニング導入度の学系別・入試難易度別比較・・・・・・・・	9
(2) 卒業論文の導入状況・・・・・・・・	19
(3) 1年次ゼミにおけるレポートの返却と教員によるコメントの有無・・・・・・・・	24
【Ⅲ】実地調査の概要・・・・・・・・	25
1. 実地評価の対象学部・学科の抽出・・・・・・・・	25
2. 実地評価における評価ポイント・・・・・・・・	26
(1) 評価基準の設計・・・・・・・・	26
(2) 評価基準・・・・・・・・	27
【Ⅳ】実地調査 項目別評価結果と取り組み紹介・・・・・・・・	31
1. 《評価の視点Ⅰ》・・・・・・・・	31
2. 《評価の視点Ⅱ》・・・・・・・・	35
3. 《評価の視点Ⅲ》・・・・・・・・	37
【Ⅴ】まとめ・河合塾からの提言・・・・・・・・	41
【巻末資料1】アンケート（質問紙）調査票 ー理工系バージョンー・・・・・・・・	44
【巻末資料2】アンケート（質問紙）調査票 ー文系学部バージョンー・・・・・・・・	61

大学のアクティブラーニング調査報告書

はじめに

河合塾は、偏差値とは異なる大学選びの基準を受験生に提供すべく、「大学の教育力」調査に取り組んできた。その活動は、2008 年「国立大学の教養教育調査報告」、2009 年「全国大学の初年次教育調査報告」として結実し、それぞれセミナーやシンポジウムを開催して大学教育関係者に還元するとともに、2010 年 6 月には「初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこと」（東信堂）を発刊し、広く調査結果を公開してきた。このような調査結果を引き継いで、2010 年に取り組んだのが「大学のアクティブラーニング調査」である。

アクティブラーニングとは、「能動的な学習」のことで、授業者が一方向的に知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究や PBL（project/problem based learning）、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語である（下記参照）。よって、アクティブラーニングが示す授業の形態や内容は非常に広く、その目的も大学や学部・学科によってさまざま。

●アクティブ・ラーニングを取り入れたさまざまな授業形態

- ☐ 学生参加型授業
・コメント・質問を書かせる／フィードバック、理解度を確認
（クリッカー／レスポンス・アナライザー、授業最後／最初に小テスト／ミニレポート など）
- ☐ 各種の共同学習を取り入れた授業
・協調学習／協同学習
- ☐ 各種の学習形態を取り入れた授業
・課題解決学習／課題探求学習／問題解決学習／問題発見学習
- ☐ PBL を取り入れた授業

（京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授 溝上慎一）

大学教育におけるアクティブラーニングの導入は、未だ意識としては「まだら模様」と言うべき現状にあり、本調査のプロセスにおいても「アクティブラーニングという言葉は初耳だ」という大学教員の声も多数あった。

しかし、アクティブラーニングという言葉が初耳であったとしても、その当該大学においても、多くのアクティブラーニングが導入され実践されているという現状がある。すなわち、言葉としてのアクティブラーニングは、説明概念としては新しいものであるかもしれないが、教育手法そのものは古くから大学教育の中に一部では組み入れられてきたものに他ならない。そして、そのアクティブラーニングが、今、改めて注目されるのは、世界的な大学教育の流れの中で「学習者中心の教育」の模索が本格化してきたこととも呼応する。そして「学習者中心の教育」、すなわち「教員が何を教えたか」ではなく「学生が何をできるようになったのか」を基準として教育を考える場合、講義形式の授業だけではなく学生が能動的に授業に参加する授業形態が今まで以上に求められることとなる。それを「アクティブラーニング」として呼称するものだからである。

本調査は、この「アクティブラーニング」が、4 年間の大学教育を通じてどのように導入され活用されているのかを調査する、初めての試みである。しかしながら、本調査の対象科目からは語学系科目、体育系科目、情報リテラシー系科目を除外とした。なぜならより専門に引き付けたアクティブラーニングに焦点を絞るためである。また学系に関しては「経済・経営・商学系学部」「工学部機械系学科」「工学部電気・電子系学科」「法学部」「理学部数学科」「理学部化学科」に限定した。なぜこれらの学部・学科に限定したかという理由は後述するが、さらに前の三者、すなわち「経済・経営・商学系学部」「工

学部機械系学科」「工学部電気・電子系学科」には、選抜した学部・学科に対して実地調査も行った。

【I】「大学のアクティブラーニング調査」の目的と背景

1. 初年次教育調査における問題意識の継承

本調査では、河合塾が 2009 年に行った「全国大学の初年次教育調査」の問題意識を継承している。初年次教育調査において、河合塾の当プロジェクトは以下の点に注目して取り組んだ。

- (1) 学生の受動的な学びから能動的な学びへの態度変容
- (2) 学生の自律・自立化をいかに促しているか
- (3) 全学生に対する一定の水準以上の初年次教育の質保証

これらの諸点に注目した理由を 2009 年度「全国大学の初年次教育調査報告書」から再録する。

.....

(1) 学生の「受動的学び」から「能動的学び」への態度変容

高校までの学びは「X は Y である」という形での命題を暗記することが中心となっている。すなわち命題知の学習である。これは大学の入学選抜のための学力試験が、命題知の正確さや量をチェックする方向で行われているためである。

これに対して、実際の社会で求められるのは、命題知のみではなく、命題知を基礎にした実践知・活用知である。命題知と実践知・活用知を例示しておくと、以下のようなものである。

命題知：「水の沸点は 100℃である」ということを覚えている力。

実践知・活用知：高度 3000m 程度の山で飯盒でコメを炊きながら「この辺じゃ沸点はどのくらいだろう」と問われて、例えば「吹きこぼれないように蓋に石でも載せておきましょう」と、飯盒内の圧力を高めることで沸点を高くするように行動できるような力。(参考：『学力問題のウソ』PHP 文庫 小笠原喜康著 118 ページ)

社会生活の中におけるこのような場面では、「水の沸点は 100℃である」という命題知を伝えただけでは何の役にも立たない。社会の中で実際に活用できる知へと変容させていくことが、大学の教育には求められているはずである。

そして、経済産業省や経済団体等の調査によると、企業は大学卒業生に、いわゆる「社会人基礎力」などの「汎用力＝ジェネリックスキル」を強く求めていることがわかっている。(※社会人基礎力とは、経済産業省によって「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」と定義された「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力を指す。さらに「前に踏み出す力」は[主体性][働きかけ力][実行力]、「考え抜く力」は[課題発見力][計画力][創造力]、「チームで働く力」は[発信力][傾聴力][柔軟性][状況把握力][規律性][ストレスコントロール力]に分解される。)

このような事実の中にも、社会で求められる「力」と、高校までの命題知習得を中心とした学習との間に存在する大きなギャップが確認できる。そして、このギャップを埋めることこそが従来の専門教育や教養教育に加え、新たに大学教育に求められているのである。初年次教育は、この学士課程教育を通じた「学習態度の変容」を実現するための入口であり、そのことが意識的に評価の視点に据えられていなければならない。

この命題知から実践知・活用知への変容は、また、「受動的学び」から「能動的学び」への変容と一体のものである。命題知を得るための学習は、受動的に講義を聴くことで実現されるが、実践知・活用知を身につけるための学習は、一方向的な講義によっては実現しえない。何らかの協働体に参加し、実践的に活動することにおいて身につく能力である。したがって初年次教育は、必然的に能動的な学習態度を促すような授業とならざるを得ないはずである。

(2) 学生の自律・自立化

学生の自律・自立には、さまざまな要素があると考えられる。自己管理、時間管理などを中心としたソーシャルスキルはもちろん、スチューデントスキルに分類されるものも、自律・自立の要素である。そこで学生が自分で目標設定を行い、学び、それをレビューして再度目標設定を行えるようになること。すなわち有用な社会人は意識的あるいは無意識的に行っている PDCA サイクルを自主的に行える能力を培う仕組みに焦点を当てる。

(3): 全学生に対する一定水準以上の初年次教育の保証

ここには2つの問題が含まれていて、一番目が「全学生に」という問題であり、二番目が「一定水準以上の」という問題である。

まず、「全学生に」という点だが、初年次教育においては、まず、すべての学生を対象に提供しているかが、問題とされるべきである。なぜならば、初年次教育は大学のユニバーサル化を含む時代背景の中で進行する学生の質的变化に対応するために行われるものであって、個々の学生の個別事情に対応するために設定されているものではない。その大学・学部が必須と考える最低限の内容が、すべての学生に保証されている必要がある。逆に言えば、すべての学生に保証している初年次教育のレベルが、その大学・学部の初年次教育のレベルを表現しているということである。逆に、たとえば文部科学省の GP に採択されている初年次教育には、「選択」とされているものが多い。これは先導的な試行としては意味があるものの、「選択」としている時点で、本当にその科目が必要な学生がその科目を「選択しない」可能性が大きく、そのまま大学・学部全体の初年次教育と見なすことはできない。すなわち、たとえばグループワークでコミュニケーションを学ばせる必要がある学生は、多くの場合これまでそういった訓練の場を経験しておらず、あるいはコミュニケーションを苦手としている。そうした学生にとって、グループワークを課す科目を「選択」とすれば、選択しないケースが増えると推測できるからである。

次に「一定水準以上の」という問題である。初年次教育の中心となる「初年次ゼミ」は、上記の変容を実現しようとするれば、内容に盛り込むことが多岐にわたり、すべてを教員裁量にまかせることはできないはずである。また、初年次教育として「初年次ゼミ」であるとか、「オリエンテーション」であるとか、さまざまなプログラムが組みまれていても、実際には一方的な講義が行われているだけという例も聞かれる。スタディスキルにせよ、学生の変容にせよ、明確な目的が教員に共有され、一定程度の内容と水準がすべての授業において担保されている必要がある。しかも初年次教育に関するプログラムは比較的新しい領域であり、教員にとっても、専門科目での教育経験をストレートに適用することはできないとされている。だからこそ、この「一定水準以上の」内容を大学・学部としてどう担保しているのかに、大学としての姿勢が表現されていると考えられる。

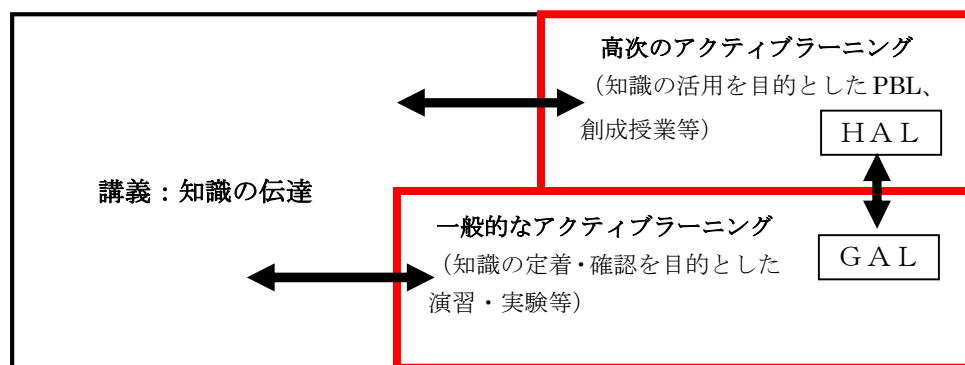
・・再録終わり

アクティブラーニングが、初年次教育から始まって4年間を通じてどのように大学教育に導入されているのか、それを上記の3つの観点を軸に豊富化しながら調査することが、本調査の出発点である。

2. アクティブラーニングが重視されるべき根拠

(1) アクティブラーニングの定義

アクティブラーニングとは冒頭に述べたとおりであるが、本調査ではアクティブラーニングを「PBL (project/problem based learning)、実験、実習、フィールドワークなどの参加型・能動型学習」と定義し、さらに、このアクティブラーニングを「知識の定着・確認を目的とした演習・実験等の一般的アクティブラーニング (GAL)」と、「知識の活用を目的とした PBL、創生授業等の高次のアクティブラーニング (HAL)」に分類した。



一般的アクティブラーニングと高次のアクティブラーニングに分けた理由は、本調査が「学生の受動的な学びから能動的な学びへの態度変容」を4年間で促しているかみるためである。つまり、命題知の定着のためのアクティブラーニングと活用知・実践知のためのアクティブラーニングを分類することで、大学が学習者の「態度変容」をどのレベルで考えているのか仮説化できると考えたからである。

(2)アクティブラーニングが重視されるに至る歴史的背景

本調査でアクティブラーニングになぜ注目するのか。それは、まず初年次教育調査において明らかにしたように、命題知から実践知・活用知への、そして受動的な学びから能動的な学びへの学生の態度変容を促すためには、実践的協働体として機能するグループワークへの参加と問題発見・解決型のPBLへの取り組みが不可欠だからである。そして、この転換は初年次で完結するものではなく、初年次から始められ4年間継続して発展することに意義がある。

そうなる背景的な問題を溝上（「名古屋高等教育研究」第7号）を参考にまとめると、近代以前の教育はコミュニティ内の大人から子供へと知識が継承されることで成立してきた。このため、知識は大人の所有範囲を超えないし、超えなくても十分であった。これに対し、近代社会は、科学技術の発展、都市化、産業化の進展とともに、子どもが人生形成していくために必要な知識が、身近なコミュニティの人間関係の所有範囲を超えることになる。それが学校教育である。子どもは学校という場で、教師から教えられて成長し、社会に適応できていた。ところがポスト近代社会においては、社会の急速な進展や情報社会化によって、子どもの人生形成に必要な知識が、学校教育でのそれを量・質とともに超えてしまっている。インターネット等を媒介として、学校以外で知識を得られるようになり、また高等教育の教員がその事態に十分に対応できていない。

こうした認識を前提とした上で、では、なぜアクティブラーニングが重要なのかを次に整理する。

(3)現状の社会の特質と教育に要請されること

まず、本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』の言う近代社会（メリトクラシー）とポスト近代社会（ハイパーメリトクラシー）で必要とされた能力の特徴を以下に対比する。

【近代社会】	【ポスト近代社会】
基礎学力	生きる力
標準性	多様性
知識量・知的操作の速度	意欲・創造性
共通尺度で比較可能性	個別性・個性
順応性	能動性
協調性・同質性	ネットワーク形成力・交渉力

上に挙げた近代社会で必要とされる能力は、知識伝達型の教育で達成可能であるのに対して、右に挙げたポスト近代社会で必要とされる能力は、知識伝達型の教育、命題知の暗記型の教育で達成されるものではない。その命題知＝専門知識を前提として、さらなるプラスアルファの能力として形成されていくしかない。

つまり、社会のポスト近代への移行により、その社会で求められる実践知・活用知とは、右表にあげたような性格を満たす種類のものへと進んできているのであり、そのためにこそ、アクティブラーニングが求められるようになってきたのである。

(4)アクティブラーニングの必要性

以前より、アクティブラーニングが学んだことを記憶する上で効果的であるという事実は、ラーニングピラミッドでも指摘されている。このラーニングピラミッドは米 National Training Laboratories が平均学習定着率（Average Learning Retention Rates）を調査したもので、授業から半年後に内容を覚えていたかどうかを、学習形式によって分類比較したものである。これから見ると、講義は 5% しかなく読書が 10%、視聴覚が 20%、デモンストレーションが 30%、グループ討論が 50%、自ら体験すると 75%、他の人に教えると 90% となっている。このピラミッドでは下に行くほどアクティブラーニングの要素が強まっており、そこでの相関関係が明瞭に顕れている。



実際、アメリカやヨーロッパ、オーストラリア等では、「モジュール科目」等と称され、週に 2 コマの時間を設けて、1 コマは講義、もう 1 コマは講義の内容を定着させるためのアクティブラーニング等を行う授業が一般的に採用されている。

またアメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）では、伝統的に講義中心だった「物理学」の授業にアクティブラーニングが 2001 年に導入され、大きな成果を挙げている。「東京大学現代教育ニーズ取組支援プログラム『ICT を活用した新たな教養教育の実現』」から一部を紹介すると、この「物理学」の授業は MIT の学生全員必修であり、1 クラスは 60～100 人程度で構成されているが、授業の最初と最後では改善率が 0.46 であったという。従来の講義型の授業では改善率は 0.2～0.3 であったことと比較すると、大きな効果であると言えることができる。

では、どのようなアクティブラーニングが導入されたのか。簡単な机上での実験なども取り入れられているが、興味深いのは「コンセプトテスト」と呼ばれる、物理概念に関する質問をして、最初は学生に個別に回答させ、その上で学生たちに 3 人～9 人程度のグループに分かれてディスカッションをさせ

ている点である。そうすると1回目の回答よりも、ディスカッションを経た後のほうが正答率が上がっていく。そして最後に教員は、学生に「自分の考えが変わるような説明を聞いた人がいたら、クラス全員にそれを聞かせてくれませんか」と質問を投げかけるのである。こうして、学生たちはコミュニケーションスキル、社会的スキルの向上の機会も与えられる（学生たちは恥ずかしがったりしないで話すことができるが、その理由は話す内容が他の人の意見だからである）。

つまり、アクティブラーニングには、単に記憶が長続きするという以上の積極的な意義があると考えられる。

アクティブラーニングの大きな特徴は、言語による伝達を超える内容があるということである。知識伝達型の講義という授業形態は、基本的に言語または視覚による一方向的な伝達が基本とされる。しかし、アクティブラーニングには、言語化されている以上の事柄が含まれざるを得ない。言語化された事柄を基に授業が進む講義と異なり、人間の一つの実践には、実は無数の側面がある。例えば、一つの問題発見・解決型の授業を想定するならば、その授業で行われていることは、問題を発見し、それに関して調査し、思惟を巡らし、筋道を立て、他者と討論し、まとめ、プレゼンテーションの準備をし、それを実践するということになる。言葉にすれば、これだけで済むことだが、実際のこのプロセスは、おそらくレポートに表現される数十倍・数百倍もの豊かさを持つはずなのである。

【Ⅱ】質問紙調査の概要

＜調査全体の概要＞

本調査は、

①「ゼミ・演習などの教育システム調査」（対象：経済・経営・商学系学部 149 学部、法学部 59 学部、工学部機械系学科 60 学科、工学部電気・電子系学科 52 学科、理学部数学科 14 学科、理学部化学科 17 学科）という質問紙調査

②「4年間を通じた大学のアクティブラーニング調査」（対象：経済・経営・商学系学部 16 学部、工学部機械系学科 11 学科、工学部電気・電子系学科 9 学科）という実地調査

の2つで構成される。

質問紙により幅広く調査を行い、その回答をポイント化する。回答のあった大学で高いポイントを示した学部・学科を中心に、大学のウェブサイトや文科省の GP 採択教育プログラムなども参考として、実地評価学部・学科を抽出した。実地評価には、当プロジェクトに属する3～5名の調査員が訪問し、ヒアリングを行うとともに実地評価ポイントに基づく採点を合議のうえで行った。

この調査方法にはそれぞれ以下の特徴がある。

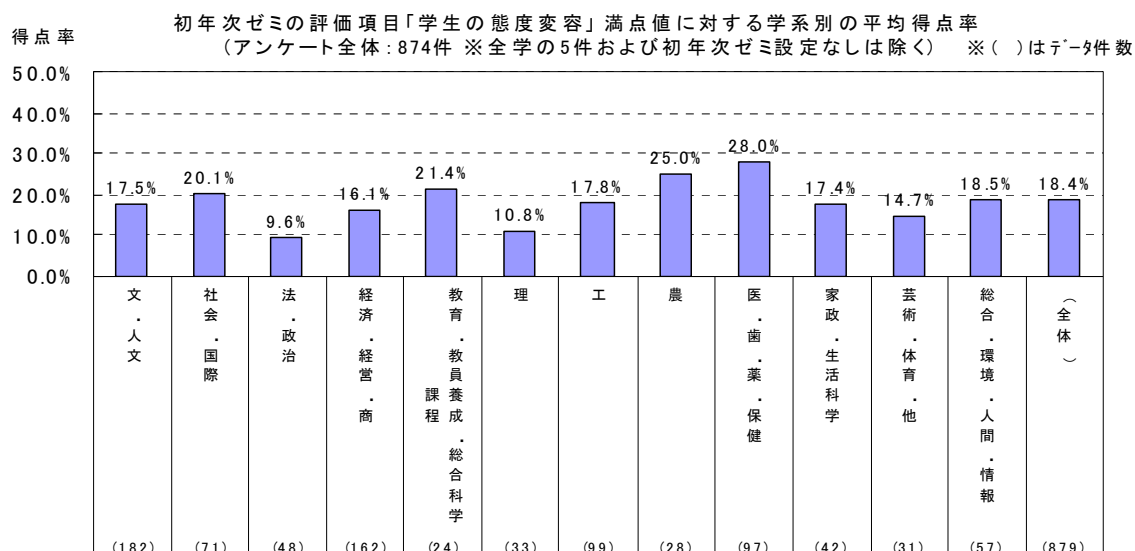
①質問紙では、単純なエビデンス（あるか、ないか、何人か・・・など）のみを質問する。定性的な質問（力を入れているか、どのようにしているか・・・など）を行うと回答者の主観により評価基準がバラバラになりやすく、統一した評価の基盤とはなりにくい点を考慮したものである。

②実地評価には、3～5名の調査員が訪問し、評価基準案をもって取材質問する。評価基準案は提示せず、取材当日のヒアリング項目だけは事前に示しておく。評価基準案は回を追うごとに再検討され、それに基づいて過去の評価ポイントも再採点するという、パフォーマンス評価の手法を取り入れた。

また、対象学部を「経済・経営・商」「法・政治」「工」「理」に絞った理由は、2009年に行った「全国大学の初年次教育調査」の結果に基づいている。この調査で初年次教育を設定している879学部の「学生の態度変容」（＝いわゆるALの導入度）を学部系統別にみると、医・歯・薬・保健学部系や農学部系の評価ポイントが平均より高く、「経済・経営・商」と「工」が平均レベルで「理」や「法・政治」系がかなり低い結果を示した。大学全体のアクティブラーニング調査を問題提起するのであれば、学問と産業界での仕事の関係性が高い（資格系学部を除く）「経済・経営・商」や「工」に焦点をあてて調べる必然性があることと、初年次教育でポイントが低かった「法・政治」や「理」についても4年間のALを調べる必要があると考えたからである。

ただし、工学部と理学部は学科によるカリキュラムの違いが大きく、学科を絞らざるを得なかった。工学系で選んだ学科は全国の工学部にほぼ設置されており、且つ伝統的な機械系学科と電気・電子系学科とした。理学系で選んだ学科は、数物系から数学科、化学生物系から化学科とした。

●2009 年度初年次ゼミにおける「学生の態度変容」(＝AL導入度)の平均得点率(学部系統別)



1. 質問紙の設計

質問紙「ゼミ・演習などの教育システム調査」は79～95頁および121～137頁のように構成した。

経済・経営・商学系学部と法学部の文系向け質問内容と、工学部機械系学科・工学部電気・電子系学科と理学部数学科・理学部化学科の理系向け質問内容の2種類に分けた。

質問紙の設計では、質問群を文系向けではA（各学年においてゼミ・演習・実験科目をどのようなやり方で学んでいるのかを問う質問群）とB（4年間を通してゼミ・演習・実験がどのように行われているのかを問う質問群）の2つ、理系向けではA（教育の成果に関する質問群）、B（各学年においてゼミ・演習・実験科目をどのようなやり方で学んでいるのかを問う質問群）、C（4年間を通してゼミ・演習・実験がどのように行われているのかを問う質問群）の3つの質問群にそれぞれ分けた。

結果的に、ポイント化し本報告書において分析するのは、①各学年においてゼミ・演習・実験科目をどのようなやり方で学んでいるのかを問う質問群への回答（文系向けではAの質問群、理系向けではBの質問群）、②卒論に関する質問への回答（文系向けではBの質問群の一部、理系向けではAの質問群の一部）の2点とした。このようにした理由は、4年間を通してゼミ・演習・実験がどのように行われているのかを問う質問群（文系向けBの質問群および理系向けCの質問群）は、質問の趣旨がうまく伝わらず、回答者の解釈が様々であるため定量的な分析を行う素データとはなり得ないと判断したためである。よって、第二部資料編でも、掲載するのは上述の2点にしぼっている。

2. 採点基準

質問紙への回答中、各学年においてゼミ・演習・実験科目をどのようなやり方で学んでいるのかを問う質問群（文系向けではAの質問群、理系向けではBの質問群）をポイント化し、実地評価する学部・学科抽出のための資料とした。

採点基準はその項目を学生が経験する比率が高い場合ほど高得点になるようにした。ここでは、ポイント化によって見えてくる全体的な傾向と、アクティブラーニング導入状況を項目ごとに分析する。

【質問紙採点基準】

<初年次ゼミ>		初年次ゼミの対象学生	
アクティブ項目	導入度	100%の場合 (25点満点) ※()はふり返しシートの場合	70%以上の場合
①グループ学習 ②ディベート ③フィールドワーク ④プレゼンテーション ⑤授業時間外学習 ⑥ふり返しシート	→ { ・全ゼミで必須 { ・頻度大 ・頻度中 ・頻度小 ・最後の発表時のみ ・教員の裁量 ・教育課題としているが把握していない ・教育課題としていない }	→ 3点 (4点) → 2点 (3点) → 1点 (1点) → 0点 (1点)	左記得点の半分
⑦レポート提出	→ { ・全ゼミで必須 { ・レポート返却必須 ・レポート返却は教員裁量 ・レポート返却しない ・教員の裁量 ・教育課題としているが把握していない ・教育課題としていない }	→ 3点 → 2点 → 1点 → 0点	
⑧ゼミの連続性	→ { ・前の学期のゼミが前提 ・前の学期のゼミが前提としていない }	→ 3点 → 0点	

<1～4年次の専門ゼミ>		1～4年次の専門ゼミの対象学生	
アクティブ項目	カバー率	100%の場合 各学年(25点満点) ※()はふり返しシートの場合	70%以上の場合
①グループ学習 ②ディベート ③フィールドワーク ④プレゼンテーション ⑤授業時間外学習 ⑥ふり返しシート ⑦レポート提出	→ { ・100%の学生が経験する ・70%以上100%未満の学生が経験する ・30%以上70%未満の学生が経験する ・30%未満の学生が経験する ・教育課題としているが把握していない ・教育課題としていない }	→ 3点 (4点) → 2点 (3点) → 1点 (1点) → 0点 (1点) → 0点	左記得点の半分
⑧ゼミの連続性	→ { ・前の学期のゼミが前提 ・前の学期のゼミが前提としていない }	→ 3点 → 0点	

<各アクティブ項目と 学年ごとの満点値>

項目	A: 初年次 ゼミ前期	B: 初年次 ゼミ後期	C: 初年次 専門ゼミ	2年次 専門ゼミ	3年次 専門ゼミ	4年次 専門ゼミ	合計
①グループ学習	3	3	3	3	3	3	12
②ディベート	3	3	3	3	3	3	12
③フィールドワーク	3	3	3	3	3	3	12
④プレゼンテーション	3	3	3	3	3	3	12
⑤授業時間外学習	3	3	3	3	3	3	12
⑥ふり返しシート	4	4	4	4	4	4	16
⑦レポート提出	3	3	3	3	3	3	12
⑧ゼミの連続性	—	3	3	3	3	3	12
計	25			25	25	25	100

(※A, B, Cについては、A～Cの中での最高点を抽出)

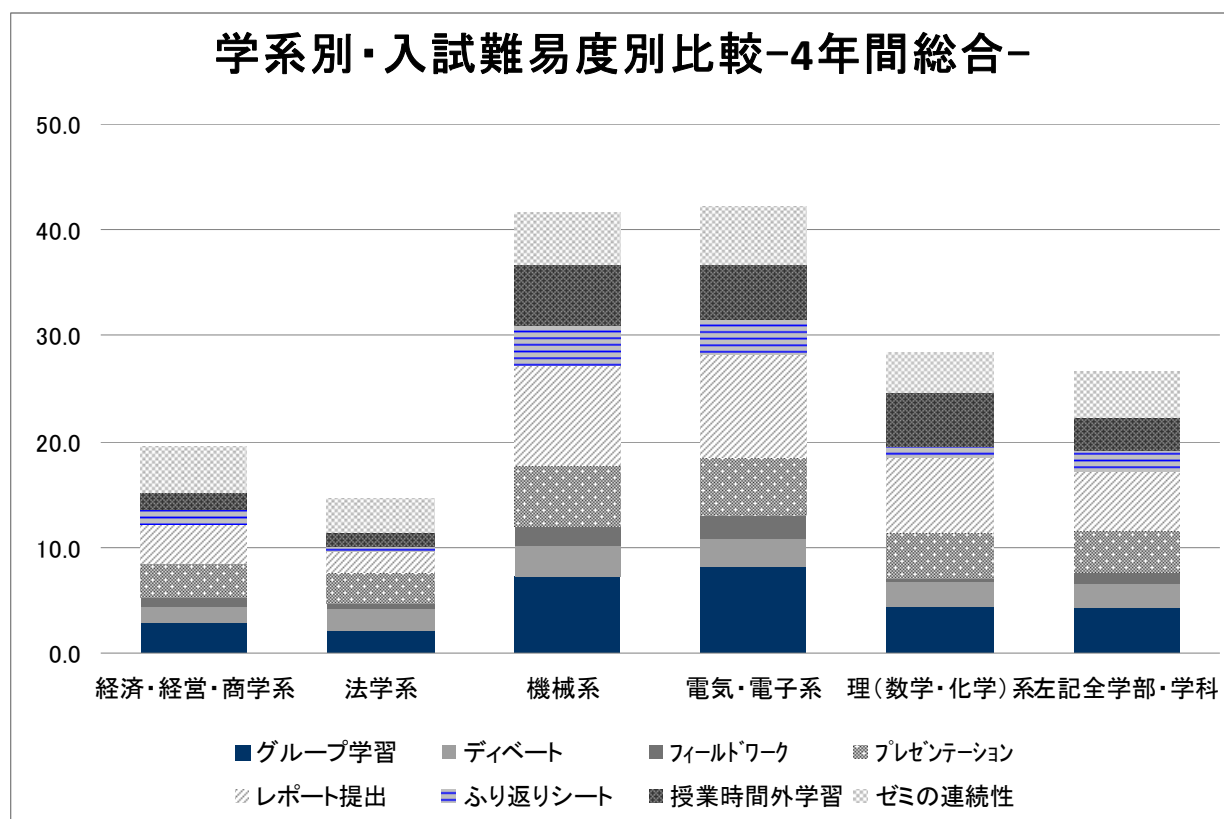
3. 回答分析

(1)4年間のアクティブラーニング導入度の学系別・入試難易度別比較

<4年間の総合平均得点>

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			25点	25点	25点	25点	100点
経済・経営・商学系	H	36	4.0	2.6	4.6	5.3	16.4
	M	49	4.0	2.8	4.6	4.4	15.9
	L	64	6.8	4.6	6.5	6.3	24.2
経済・経営・商学系 集計		149	5.2	3.5	5.4	5.4	19.6
法学系	H	22	5.8	1.6	3.1	2.9	13.4
	M	22	2.3	1.4	4.2	3.8	11.6
	L	15	6.1	4.2	5.4	5.1	20.8
法学系 集計		59	4.6	2.2	4.1	3.8	14.6
機械系	H	8	9.2	8.1	13.1	11.0	41.4
	M	26	9.8	9.8	10.9	13.2	43.6
	L	26	7.1	7.5	10.7	14.6	39.9
機械系 集計		60	8.5	8.6	11.1	13.5	41.7
電気・電子系	H	4	7.3	8.0	10.0	11.3	36.5
	M	19	7.4	11.1	12.4	12.9	43.8
	L	29	9.4	8.9	10.6	13.2	42.0
電気・電子系 集計		52	8.5	9.6	11.2	13.0	42.2
理学(数学・化学)系	H	10	4.0	5.3	7.3	14.0	30.6
	M	18	5.6	5.2	6.3	8.9	26.0
	L	3	6.0	7.0	6.5	17.0	36.5
理(数学・化学)系 集計		31	5.1	5.4	6.6	11.3	28.5
上記全学部・学科		351	6.1	5.2	7.1	8.2	26.7

※1～4年次は25点満点、総合は100点満点



※系統名上部の数値は学部・学科数

※4年間の総合は100点満点

経済・経営・商学系学部、法学部、工学部機械系学科、工学部電気・電子系学科、理学部 2 学科における 4 年間のアクティブラーニング導入度を比較すると、次のような有意な差が見られた。

工学部電気・電子系学科が 42.2 ポイントで一番高く、次いで工学部機械系学科が 41.7 ポイントである。理学部 2 学科が 28.5 ポイントと続き、その次が経済・経営・商学系学部で 19.6 ポイント、最も低いのが法学部の 14.6 ポイントであった。

本調査で実地評価の対象とする工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と経済・経営・商学系学部の 2 つの学系を比較すると工学部（機械系学科、電気・電子系学科）が 2 倍以上ものポイント差を示していることに留意したい。

入試難易度別に比較すると、いずれの学系も偏差値 45.0 未満（L）でアクティブラーニング導入度が最も高いという結果が得られた。偏差値 55.0 以上（H）と偏差値 45.0～55.0（M）では大きな差が見られない場合でも、（L）との間には有意な差が表れている。

これは、ユニバーサル・アクセス型（※）ほど学生への教育効果に敏感であり、アクティブラーニングの導入を進めていることを表わしていると推測される。

このグラフでは、アクティブラーニングの各要素を紋様別に表示して加算してあるのだが、一目見て、「グループ学習」「振り返りシート」「時間外学習」等の項目が、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と経済・経営・商学系学部との間には大きな差があることが分かる。この各要素別比較については、項を改めて次から見ていくこととしたい。

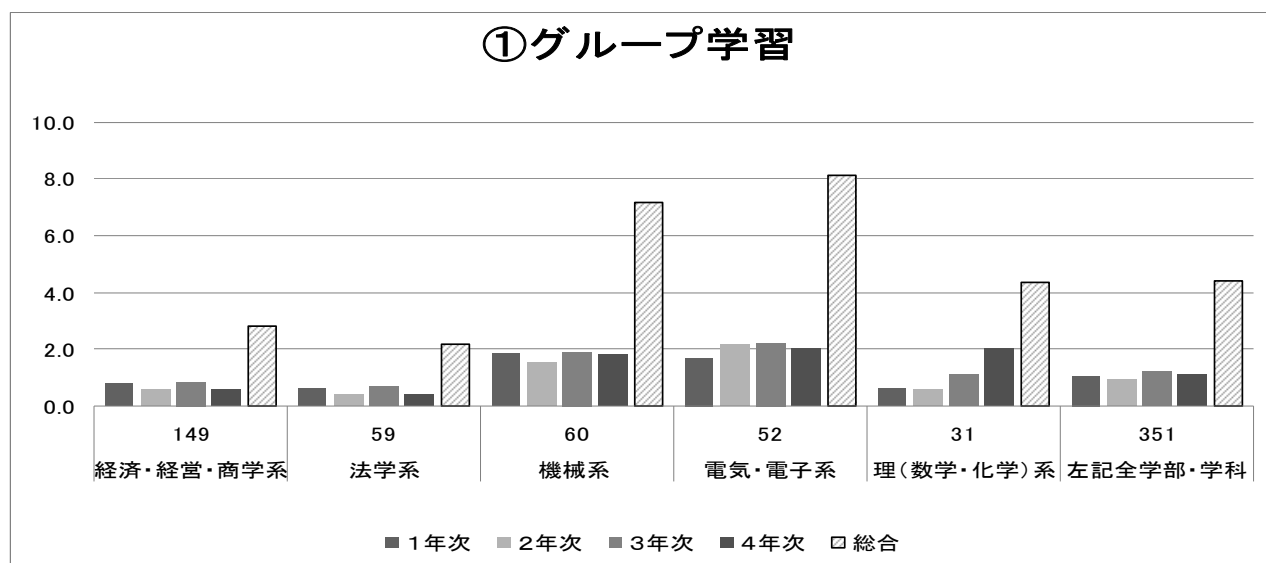
（※）アメリカの高等教育研究者マーチン・トロウによれば、大学進学率が世代の 15%未満の段階では大学は「エリート型」、15～50%が「マス型」、50%以上が「ユニバーサル型」に分類される。欧米や日本のように大学進学率が 50%を超える国では、これら 3 つの種類の大学が並存している。

①グループ学習

＜グループ学習の学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.7	0.5	0.8	0.6	2.5
	M	49	0.5	0.5	0.6	0.4	2.1
	L	64	1.1	0.7	1.0	0.7	3.6
経済・経営・商学系 集計		149	0.8	0.6	0.8	0.6	2.8
法学系	H	22	1.0	0.4	0.7	0.4	2.4
	M	22	0.3	0.2	0.7	0.5	1.7
	L	15	0.7	0.9	0.7	0.4	2.7
法学系 集計		59	0.7	0.4	0.7	0.4	2.2
機械系	H	8	1.6	0.8	1.5	0.8	4.6
	M	26	2.2	1.6	2.0	1.7	7.5
	L	26	1.6	1.7	2.0	2.3	7.7
機械系 集計		60	1.9	1.5	1.9	1.8	7.2
電気・電子系	H	4	2.3	2.3	2.5	2.5	9.5
	M	19	1.5	2.5	2.3	1.8	8.2
	L	29	1.8	2.0	2.2	2.0	7.9
電気・電子系 集計		52	1.7	2.2	2.2	2.0	8.2
理学(数学・化学)系	H	10	0.8	0.6	1.2	2.5	5.1
	M	18	0.7	0.7	1.2	1.6	4.2
	L	3	0.0	0.0	0.0	3.0	3.0
理(数学・化学)系 集計		31	0.6	0.6	1.1	2.0	4.4
上記全学部・学科		351	1.1	1.0	1.2	1.1	4.4

※1～4年次は3点満点、4年間の総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

グループ学習について4年間の合計を学系別に比較すると、工学部電気・電子系学科が8.2ポイントと最も高く、機械系学科が7.2ポイントと高いポイントを示している。理学系2学科が4.4ポイントと続き、経済・経営・商学系学部が2.8ポイント、法学部が2.2ポイントと最も低いポイントを示している。

工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と経済・経営・商学系学部とでは、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）が3倍近い導入が行われていることに留意したい。

入試難易度別に比較すると、経済・経営・商学系学部においてのみ（L）における導入が高いポイントを示しているが、理学部では逆に（H）が高いポイントを示しており、難易度による有意な傾向を見てとることはできなかった。

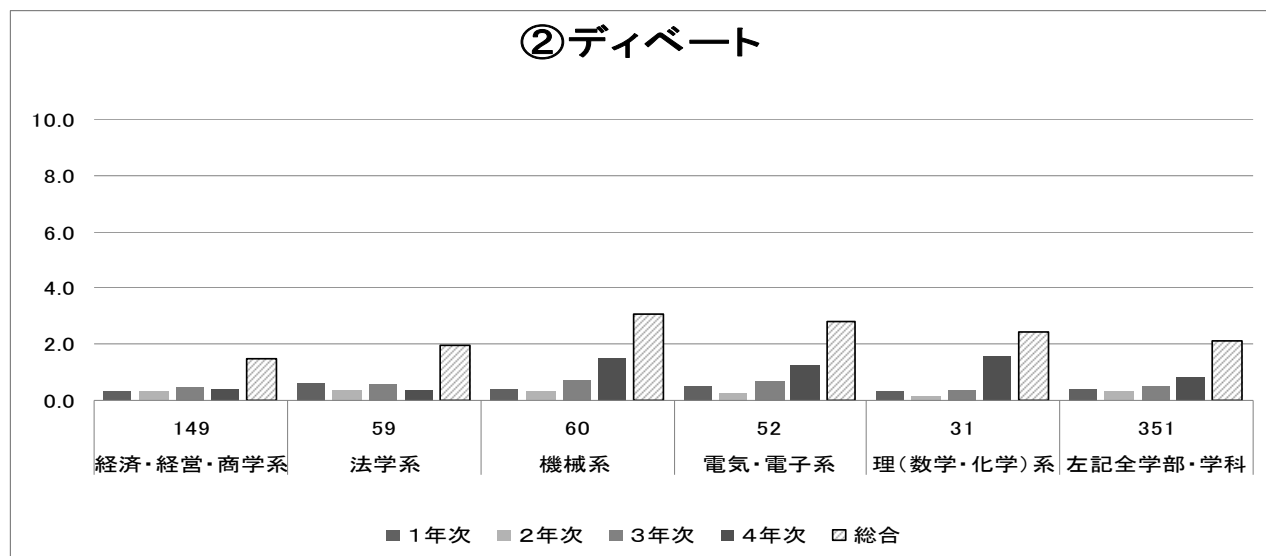
学年別に比較すると、理学系2学科では4年次に多く導入されている点が目立つが、他の学系においては学年ごとに大きな差は見られなかった。

②ディベート

＜ディベートの学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.3	0.4	0.4	0.4	1.5
	M	49	0.4	0.3	0.5	0.4	1.6
	L	64	0.2	0.3	0.5	0.4	1.4
経済・経営・商学系 集計		149	0.3	0.3	0.5	0.4	1.5
法学系	H	22	1.0	0.4	0.5	0.3	2.3
	M	22	0.3	0.1	0.5	0.4	1.2
	L	15	0.6	0.7	0.8	0.5	2.6
法学系 集計		59	0.6	0.4	0.6	0.4	2.0
機械系	H	8	0.4	0.0	0.9	1.1	2.4
	M	26	0.6	0.5	0.8	1.7	3.6
	L	26	0.3	0.2	0.7	1.5	2.7
機械系 集計		60	0.4	0.3	0.8	1.6	3.1
電気・電子系	H	4	0.0	0.0	1.0	1.0	2.0
	M	19	0.5	0.5	0.8	1.3	3.1
	L	29	0.7	0.1	0.6	1.3	2.7
電気・電子系 集計		52	0.5	0.3	0.7	1.3	2.8
理学(数学・化学)系	H	10	0.3	0.3	0.3	1.8	2.7
	M	18	0.4	0.1	0.4	1.4	2.4
	L	3	0.0	0.0	0.0	1.7	1.7
理(数学・化学)系 集計		31	0.3	0.2	0.4	1.6	2.4
上記全学部・学科		351	0.4	0.3	0.5	0.8	2.1

※1～4年次は3点満点、4年間の総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

ディベートについて4年間の合計を学系別に比較すると、やはり工学部（機械系学科、電気・電子系学科）が3.1ポイント（電気・電子系）、2.8ポイント（機械系）と高く、次いで理学部2学科が2.4ポイント、法学部が2.0ポイント、最も低かったのが経済・経営・商学系学部で1.5ポイントにとどまった。経済・経営・商学系学部こそ、卒業後のビジネスの場面でネゴシエーション等が想定されディベートの必要性が高いと思われるが、意外な結果である。

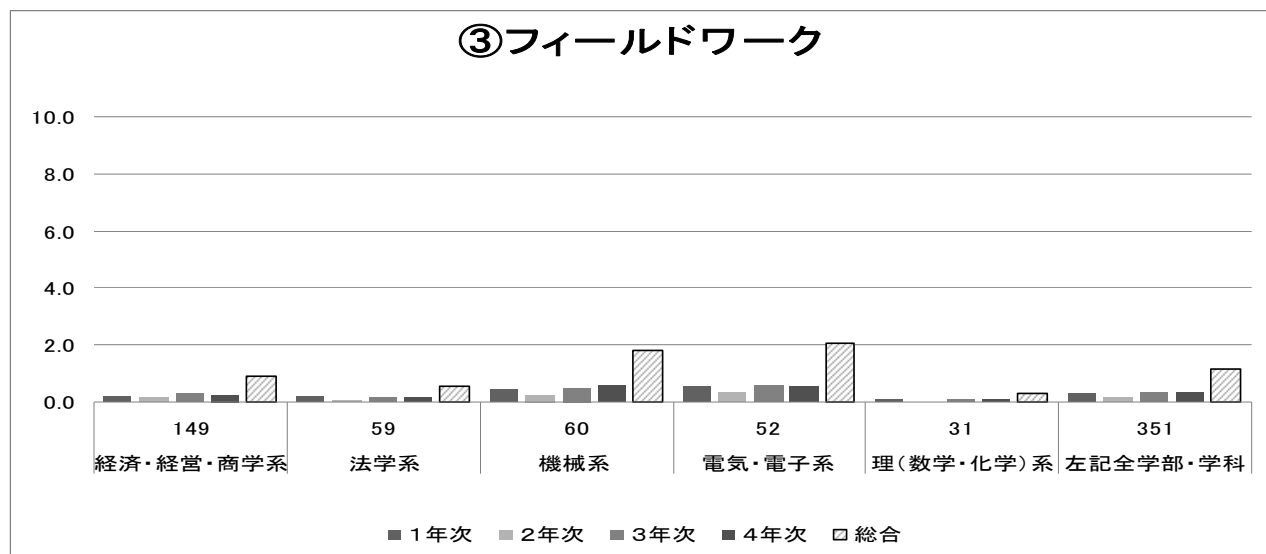
学年別に比較すると、経済・経営・商学系学部と法学部では学年ごとの有意な差は見られないのに対し、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）、理学部2学科では4年次が飛躍的に高い数値を示している。これは卒業研究においてディベートが行われていることを示していると思われる。

③フィールドワーク

＜フィールドワークの学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.2	0.2	0.3	0.3	1.0
	M	49	0.1	0.0	0.2	0.1	0.5
	L	64	0.3	0.3	0.4	0.3	1.2
経済・経営・商学系 集計		149	0.2	0.2	0.3	0.3	0.9
法学系	H	22	0.4	0.0	0.1	0.1	0.6
	M	22	0.0	0.0	0.1	0.2	0.4
	L	15	0.3	0.1	0.3	0.2	0.8
法学系 集計		59	0.2	0.0	0.2	0.2	0.6
機械系	H	8	0.4	0.0	0.5	0.3	1.1
	M	26	0.4	0.2	0.2	0.3	1.2
	L	26	0.5	0.3	0.8	1.0	2.7
機械系 集計		60	0.4	0.3	0.5	0.6	1.8
電気・電子系	H	4	0.0	0.0	0.3	0.3	0.5
	M	19	0.7	0.5	0.8	0.6	2.6
	L	29	0.6	0.3	0.5	0.6	2.0
電気・電子系 集計		52	0.6	0.3	0.6	0.6	2.1
理学(数学・化学)系	H	10	0.3	0.0	0.4	0.3	1.0
	M	18	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	L	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
理(数学・化学)系 集計		31	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3
上記全学部・学科		351	0.3	0.2	0.3	0.3	1.1

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

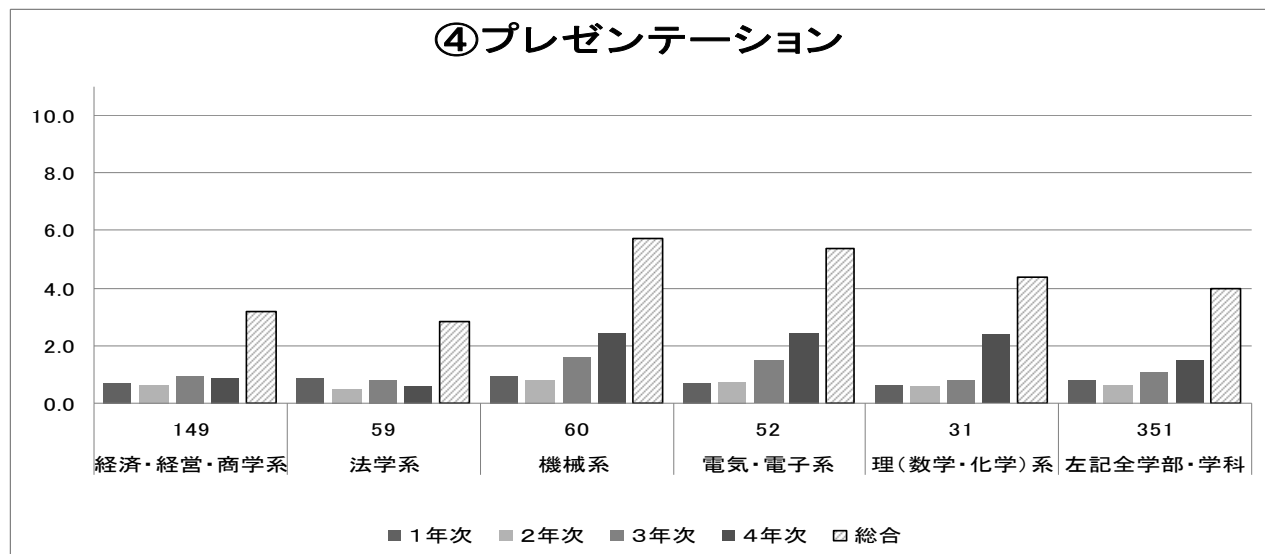
フィールドワークについては、他の項目と比較すると「振り返りシート」の導入度に続いて2番目に低い項目であった。4年間の合計を学系別に比較すると、工学部電気・電子系学科が2.1ポイントと最も高い数値を示し、工学部機械系学科が1.8ポイントとそれに続いた。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）が他の学系よりも高い数値を示したものの、他の学系については有意な差が見られなかった。学年次および入試難易度別では、有意な差が見られなかった。

④プレゼンテーション

＜プレゼンテーションの学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.7	0.5	0.8	1.0	3.0
	M	49	0.6	0.6	0.9	0.7	2.8
	L	64	0.8	0.8	1.1	1.0	3.6
経済・経営・商学系 集計		149	0.7	0.7	0.9	0.9	3.2
法学系	H	22	1.3	0.4	0.8	0.7	3.3
	M	22	0.5	0.4	0.8	0.5	2.2
	L	15	0.8	0.7	0.9	0.7	3.1
法学系 集計		59	0.9	0.5	0.8	0.6	2.8
機械系	H	8	1.2	1.1	2.6	2.3	7.2
	M	26	0.9	1.1	1.3	2.3	5.6
	L	26	0.9	0.4	1.5	2.7	5.4
機械系 集計		60	0.9	0.8	1.6	2.5	5.7
電気・電子系	H	4	0.0	0.0	2.5	3.0	5.5
	M	19	0.5	1.0	1.4	2.3	5.2
	L	29	0.9	0.7	1.4	2.5	5.5
電気・電子系 集計		52	0.7	0.7	1.5	2.5	5.4
理学(数学・化学)系	H	10	0.2	0.3	0.5	3.0	3.9
	M	18	0.9	0.7	0.9	1.9	4.4
	L	3	1.0	1.0	1.0	3.0	6.0
理(数学・化学)系 集計		31	0.7	0.6	0.8	2.4	4.4
上記全学部・学科		351	0.8	0.7	1.1	1.5	4.0

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

プレゼンテーションは、他の項目と比較すると「レポート提出」「グループ学習」「ゼミの連続性」の導入度に次いで4番目に高い項目である。

学系別に比較すると工学部（機械系学科、電気・電子系学科）が最も高い数値を示しているが、それでも経済・経営・商学系学部や法学部、理学部2学科との差が他の項目ほど大きく開いていない。どの学系でもある程度、導入されているアクティブラーニングであると言えよう。

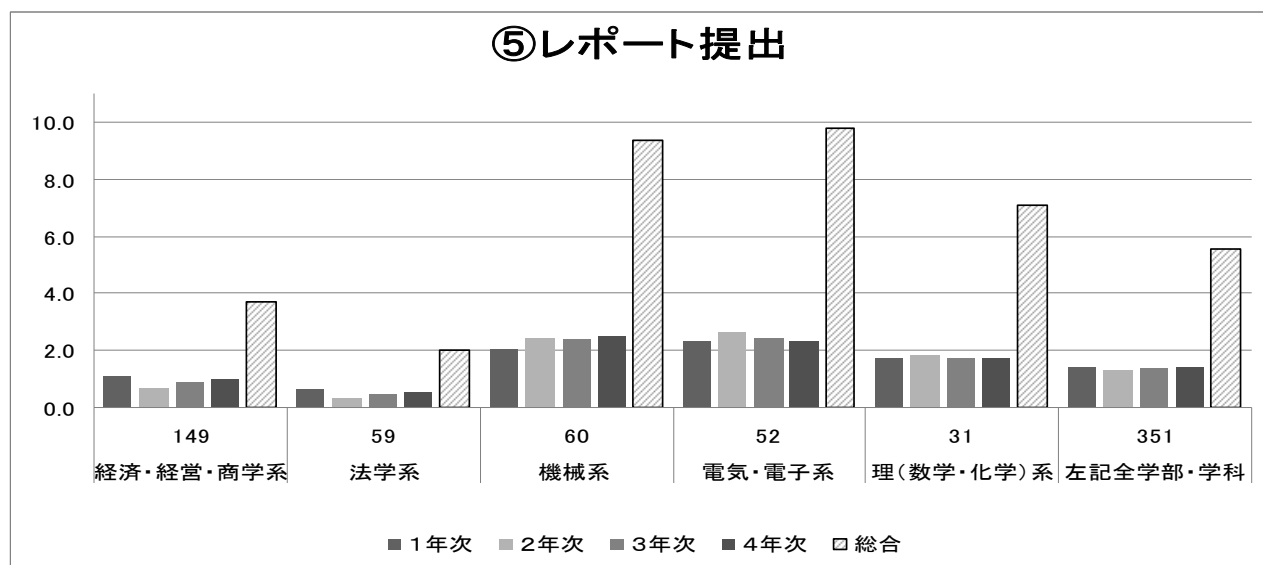
学年別にみると工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と理学部2学科では4年次の導入度が高い。これは卒業研究に組み込まれているためと見られる。

⑤レポート提出

＜レポート提出の学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.7	0.4	0.7	1.0	2.8
	M	49	1.1	0.6	0.7	0.8	3.2
	L	64	1.4	0.9	1.1	1.2	4.6
経済・経営・商学系 集計		149	1.1	0.7	0.9	1.0	3.7
法学系	H	22	0.6	0.1	0.2	0.3	1.3
	M	22	0.2	0.3	0.5	0.5	1.5
	L	15	1.2	0.8	0.9	1.0	3.9
法学系 集計		59	0.6	0.3	0.5	0.5	2.0
機械系	H	8	2.2	2.4	2.1	2.3	8.9
	M	26	2.4	2.5	2.5	2.5	10.0
	L	26	1.7	2.3	2.4	2.5	8.9
機械系 集計		60	2.1	2.4	2.4	2.5	9.4
電気・電子系	H	4	3.0	3.0	1.5	2.3	9.8
	M	19	2.2	3.0	2.8	2.1	10.0
	L	29	2.3	2.4	2.4	2.5	9.6
電気・電子系 集計		52	2.3	2.7	2.5	2.3	9.8
理学(数学・化学)系	H	10	1.3	1.7	1.8	2.1	6.9
	M	18	1.8	1.9	1.6	1.3	6.7
	L	3	3.0	2.0	2.0	3.0	10.0
理(数学・化学)系 集計		31	1.8	1.8	1.7	1.7	7.1
上記全学部・学科		351	1.4	1.3	1.4	1.4	5.6

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

レポート提出については、各項目の中で最も高い数値を示した。

学部別に比較すると、工学部が9.8ポイント（電気・電子系）、9.4ポイント（機械系）と、高い数値を示し、理学部2学科が次いで7.1ポイントであったのに対して、経済・経営・商学系学部は3.7ポイント、法学部では2.0ポイントと大きな差が開いた。

学年別には有意な差は見られない。

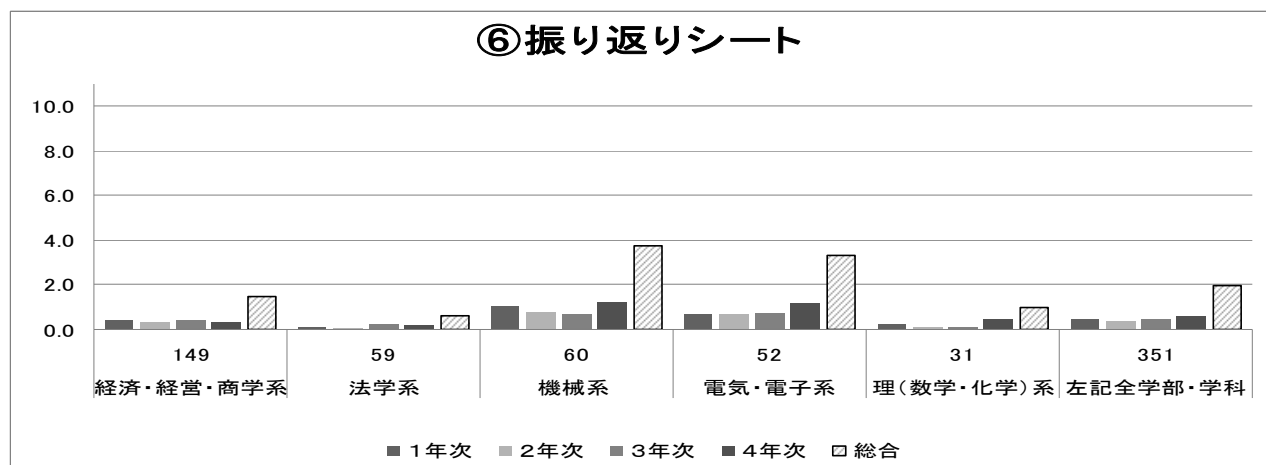
入試難易度別では、経済・経営・商学系学部、法学部、理学部2学科で、低難易度（L）の方が導入度が高い数値を示した。特に法学部では、その差は2倍以上にも達している。

⑥振り返りシート

＜振り返りシートの学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			4点	4点	4点	4点	16点
経済・経営・商学系	H	36	0.3	0.2	0.4	0.4	1.2
	M	49	0.2	0.2	0.2	0.2	0.8
	L	64	0.7	0.5	0.6	0.4	2.2
経済・経営・商学系 集計		149	0.5	0.3	0.4	0.3	1.5
法学系	H	22	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2
	M	22	0.0	0.0	0.4	0.3	0.7
	L	15	0.2	0.2	0.5	0.3	1.2
法学系 集計		59	0.1	0.1	0.3	0.2	0.6
機械系	H	8	2.0	1.6	1.8	1.8	7.1
	M	26	1.0	0.7	0.6	1.1	3.5
	L	26	0.7	0.6	0.5	1.3	3.0
機械系 集計		60	1.0	0.8	0.7	1.3	3.8
電気・電子系	H	4	0.5	0.5	0.5	0.5	2.0
	M	19	0.3	0.8	1.1	1.6	3.8
	L	29	1.0	0.6	0.6	1.0	3.1
電気・電子系 集計		52	0.7	0.7	0.8	1.2	3.3
理学(数学・化学)系	H	10	0.4	0.4	0.4	0.4	1.6
	M	18	0.2	0.0	0.0	0.4	0.6
	L	3	0.0	0.0	0.0	1.3	1.3
理(数学・化学)系 集計		31	0.3	0.1	0.1	0.5	1.0
上記全学部・学科		351	0.5	0.4	0.5	0.6	2.0

※1～4年次は4点満点、総合は16点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は4点満点、総合は16点満点

各年次の満点は4点と他の項目より加重配点にしているが、全体的に導入の度合いが低い項目である。学系別にみると、特に法学部 0.6 ポイント、理学部 1.0 ポイントが低く、経済・経営・商学系学部にしても 1.5 ポイントにとどまる。工学部機械系学科が 3.8 ポイント、電気・電子系学科が 3.3 ポイント、と比較的高い数値であるが、全体的にこの取り組みは進んでいないことを示している。

学年別に見ても、特に初年次教育で良く取り組まれていることを示す数値が示されたわけではなかった。

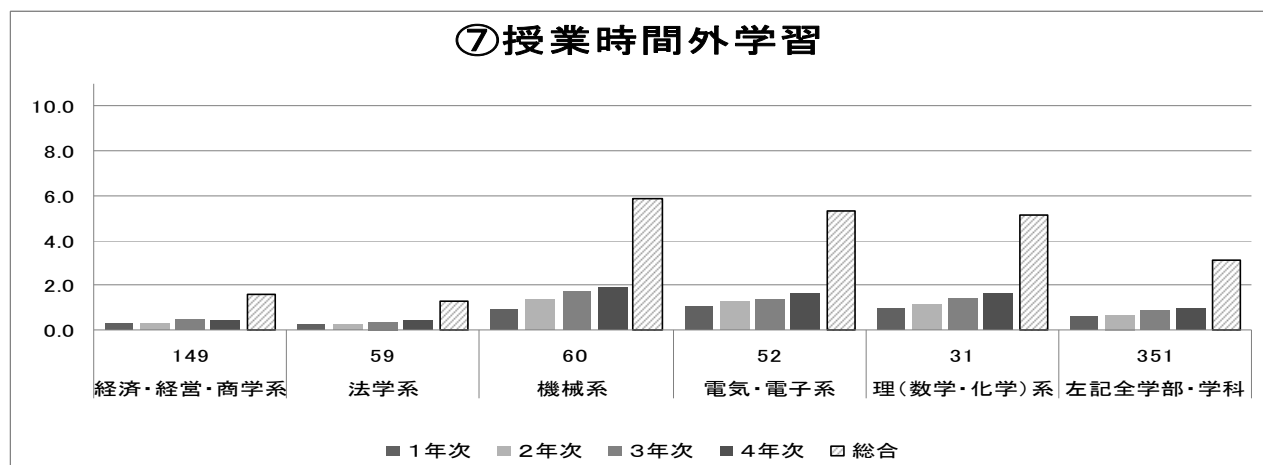
入試難易度別に見ると、経済・経営・商学系学部や法学部では（L）が、他の2倍以上のポイントであるのが有意な差である。文系学部の（H）や（M）ではほとんど取り組まれていない、といえる。

⑦授業時間外学習

＜授業時間外学習の学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.3	0.3	0.5	0.5	1.6
	M	49	0.3	0.3	0.4	0.4	1.4
	L	64	0.4	0.4	0.5	0.4	1.7
経済・経営・商学系 集計		149	0.3	0.3	0.5	0.4	1.6
法学系	H	22	0.3	0.1	0.2	0.2	0.8
	M	22	0.3	0.3	0.5	0.4	1.5
	L	15	0.2	0.3	0.3	0.7	1.5
法学系 集計		59	0.3	0.2	0.3	0.4	1.3
機械系	H	8	0.8	1.4	2.1	1.5	5.8
	M	26	1.0	1.4	1.6	1.8	5.8
	L	26	0.9	1.2	1.7	2.1	5.9
機械系 集計		60	0.9	1.3	1.7	1.9	5.8
電気・電子系	H	4	0.8	0.8	1.0	1.0	3.5
	M	19	1.1	1.4	1.6	1.6	5.7
	L	29	1.0	1.3	1.3	1.8	5.3
電気・電子系 集計		52	1.0	1.3	1.4	1.6	5.3
理学(数学・化学)系	H	10	0.6	1.2	1.8	2.1	5.6
	M	18	1.2	1.2	1.3	1.3	4.9
	L	3	1.0	1.0	1.0	2.0	5.0
理(数学・化学)系 集計		31	1.0	1.1	1.4	1.6	5.2
上記全学部・学科		351	0.6	0.7	0.9	1.0	3.1

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

時間外学習については、学系によって大きな差がついた項目である。

工学部電気・電子系学科 5.8 ポイント、機械系学科 5.3 ポイント、理学部 2 学科 5.2 ポイントであったのに対し、経済・経営・商学系学部では 1.6 ポイント、法学部では 1.3 ポイントと、理系学部が文系学部の 4 倍程度の高い数値を示している。

学系による全般的な勉強量の差が、このようなところでも表現されていると見ることができる。

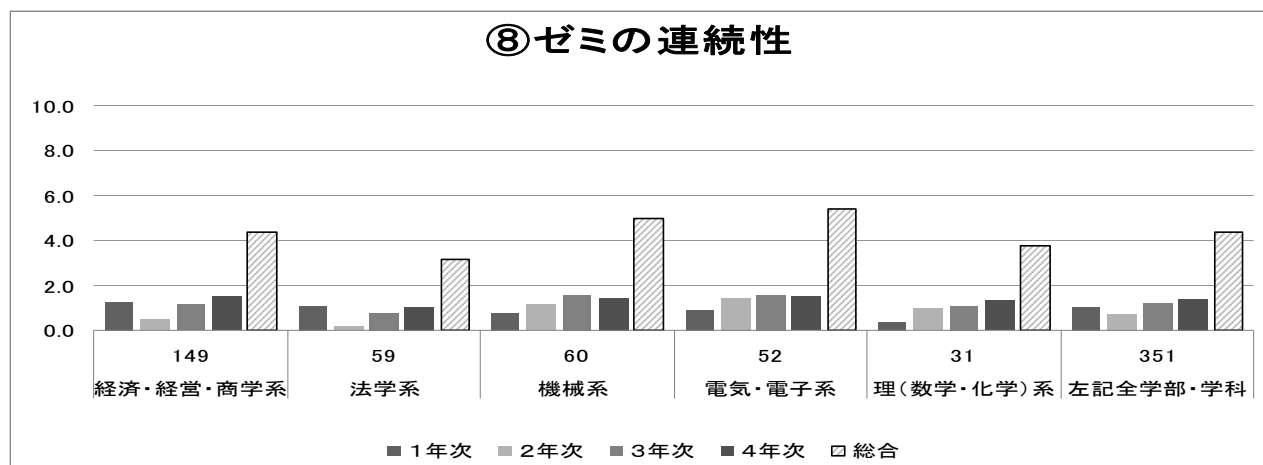
学年別、難易度別では有意な差は見られない。

⑧ゼミの連続性

＜ゼミの連続性の学年別平均得点＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～55.0 L:45.0未満	学部 学科数	1年次 (初年次含む)	2年次	3年次	4年次	総合
			3点	3点	3点	3点	12点
経済・経営・商学系	H	36	0.8	0.1	0.8	1.2	2.8
	M	49	0.7	0.3	1.1	1.4	3.5
	L	64	2.0	0.8	1.4	1.8	6.0
経済・経営・商学系 集計		149	1.3	0.5	1.1	1.5	4.4
法学系	H	22	1.0	0.1	0.6	0.8	2.6
	M	22	0.6	0.1	0.8	1.0	2.5
	L	15	2.0	0.5	1.1	1.4	5.0
法学系 集計		59	1.1	0.2	0.8	1.0	3.2
機械系	H	8	0.8	0.8	1.7	1.1	4.3
	M	26	1.2	1.6	2.0	1.7	6.5
	L	26	0.5	0.8	1.2	1.3	3.7
機械系 集計		60	0.8	1.2	1.6	1.5	5.0
電気・電子系	H	4	0.8	1.5	0.8	0.8	3.8
	M	19	0.6	1.3	1.6	1.7	5.2
	L	29	1.1	1.6	1.7	1.4	5.8
電気・電子系 集計		52	0.9	1.4	1.6	1.5	5.4
理(数学・化学)系	H	10	0.2	0.9	1.1	1.8	3.9
	M	18	0.4	0.7	0.8	0.8	2.8
	L	3	1.0	3.0	2.5	3.0	9.5
理(数学・化学)系 集計		31	0.4	1.0	1.1	1.4	3.8
上記全学部・学科		351	1.0	0.7	1.2	1.4	4.4

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点



※学系名上部の数値は学部・学科数

※1～4年次は3点満点、総合は12点満点

ゼミの連続性については工学部では、電気・電子系学科 5.4 ポイント、機械系学科 5.0 ポイントと高い数値であるものの、経済・経営・商学系学部 4.4 ポイントや理学部 2 学科 3.8 ポイントもそれほど大きな差とはなっていない。

学年別にみると、経済・経営・商学系学部や法学部では 2 年次に大きく落ち込んでおり、文系学部では初年次ゼミと 3～4 年次の専門ゼミの間の 2 年次がアクティブラーニングの谷間になっていることを示している。

(2)卒業論文の導入状況

①必須の有無

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	必須である		必須でない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	11	30.6%	25	69.4%		0.0%	36	100.0%
	M	16	32.7%	31	63.3%	2	4.1%	49	100.0%
	L	28	43.8%	35	54.7%	1	1.6%	64	100.0%
経済・経営・商学系 集計		55	36.9%	91	61.1%	3	2.0%	149	100.0%
法学系	H	2	9.1%	20	90.9%		0.0%	22	100.0%
	M	2	9.1%	20	90.9%		0.0%	22	100.0%
	L	3	20.0%	12	80.0%		0.0%	15	100.0%
法学系 集計		7	11.9%	52	88.1%		0.0%	59	100.0%
機械系	H	8	100.0%		0.0%		0.0%	8	100.0%
	M	24	92.3%	2	7.7%		0.0%	26	100.0%
	L	25	96.2%	1	3.8%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		57	95.0%	3	5.0%		0.0%	60	100.0%
電気・電子系	H	4	100.0%		0.0%		0.0%	4	100.0%
	M	16	84.2%	3	15.8%		0.0%	19	100.0%
	L	29	100.0%		0.0%		0.0%	29	100.0%
電気・電子系 集計		49	94.2%	3	5.8%		0.0%	52	100.0%
理学(数学・化学)系	H	6	60.0%	4	40.0%		0.0%	10	100.0%
	M	10	55.6%	8	44.4%		0.0%	18	100.0%
	L	3	100.0%		0.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		19	61.3%	12	38.7%		0.0%	31	100.0%
上記全学部・学科		187	53.3%	161	45.9%	3	0.9%	351	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

卒論が必須である比率は、工学部機械系学科では 95.0%、電気・電子系学科が 94.2%であるのに対して、理学部 2 学科が 61.3%、経済・経営・商学系学部 36.9%、法学部では 11.9%であった。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、ほぼ全学科で必須に近く、経済・経営・商学系学部では 3 分の 1 強にとどまっている。

入試難易度別では、経済・経営・商学系学部では（L）が必須としている割合が 1.5 倍程度高いという結果を示した。

②卒論が必須とされていない場合の卒論を執筆する学生の割合

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	30%未満		30%以上70%未満		70%以上		未回答		総計	
経済・経営・商	H	2	8.0%	7	28.0%	13	52.0%	3	12.0%	25	100.0%
	M	5	16.1%	14	45.2%	12	38.7%		0.0%	31	100.0%
	L	8	22.9%	12	34.3%	12	34.3%	3	8.6%	35	100.0%
経済・経営・商 集計		15	16.5%	33	36.3%	37	40.7%	6	6.6%	91	100.0%
法	H	8	40.0%	4	20.0%	2	10.0%	6	30.0%	20	100.0%
	M	6	30.0%	8	40.0%	2	10.0%	4	20.0%	20	100.0%
	L	3	25.0%	3	25.0%	2	16.7%	4	33.3%	12	100.0%
法 集計		17	32.7%	15	28.8%	6	11.5%	14	26.9%	52	100.0%

※学部[学科] 1 学年の学生数を母数とする

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

それでは、卒論必須割合が低い経済・経営・商学系学部と法学部について、「必須でない」場合の卒論執筆率を見ることにする。

法学部では「70%以上の学生が執筆する」と回答した学部は全体の 11.5%しかなかったのに対し、経済・経営・商学系学部では 40.7%もの高い比率で学生が卒論を執筆している点が注目される。法学部では卒論執筆せずに卒業する学生の割合が多いことがわかる。

③卒論の審査体制

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	複数教員による審査		担当教員のための審査		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	1	2.8%	35	97.2%		0.0%	36	100.0%
	M	4	8.2%	43	87.8%	2	4.1%	49	100.0%
	L	5	7.8%	54	84.4%	5	7.8%	64	100.0%
経済・経営・商学系 集計		10	6.7%	132	88.6%	7	4.7%	149	100.0%
法学系	H	5	22.7%	10	45.5%	7	31.8%	22	100.0%
	M	1	4.5%	17	77.3%	4	18.2%	22	100.0%
	L	1	6.7%	10	66.7%	4	26.7%	15	100.0%
法学系 集計		7	11.9%	37	62.7%	15	25.4%	59	100.0%
機械系	H	6	75.0%	2	25.0%		0.0%	8	100.0%
	M	21	80.8%	5	19.2%		0.0%	26	100.0%
	L	19	73.1%	7	26.9%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		46	76.7%	14	23.3%		0.0%	60	100.0%
電気・電子系	H	3	75.0%	1	25.0%		0.0%	4	100.0%
	M	11	57.9%	8	42.1%		0.0%	19	100.0%
	L	20	69.0%	8	27.6%	1	3.4%	29	100.0%
電気・電子系 集計		34	65.4%	17	32.7%	1	1.9%	52	100.0%
理学(数学・化学)系	H	7	70.0%	2	20.0%	1	10.0%	10	100.0%
	M	9	50.0%	6	33.3%	3	16.7%	18	100.0%
	L	2	66.7%	1	33.3%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		18	58.1%	9	29.0%	4	12.9%	31	100.0%
上記全学部・学科		115	32.8%	209	59.5%	27	7.7%	351	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

それでは卒論を審査する際の教員体制はどうであろうか。卒論の複数教員による審査が導入されている比率は、工学部機械系学科 76.7%と最も高く、次いで電気・電子系学科 65.4%、理学部 2 学科 58.1%であるのに対し、法学部は 11.9%、経済・経営・商学系学部に至ってはわずか 6.7%という結果であった。経済・経営・商学系学部や法学部では、卒論の質・成績評価への学部としての意識性が低い、あるいは個々の教員のゼミの治外法権化を示しているのではないだろうか。

④卒論の審査基準

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	審査[評価]基準の チェックシートがある		審査[評価]基準の チェックシートがない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	2	5.6%	31	86.1%	3	8.3%	36	100.0%
	M	1	2.0%	46	93.9%	2	4.1%	49	100.0%
	L	6	9.4%	54	84.4%	4	6.3%	64	100.0%
経済・経営・商学系 集計		9	6.0%	131	87.9%	9	6.0%	149	100.0%
法学系	H		0.0%	15	68.2%	7	31.8%	22	100.0%
	M		0.0%	19	86.4%	3	13.6%	22	100.0%
	L	1	6.7%	9	60.0%	5	33.3%	15	100.0%
法学系 集計		1	1.7%	43	72.9%	15	25.4%	59	100.0%
機械系	H	4	50.0%	4	50.0%		0.0%	8	100.0%
	M	10	38.5%	15	57.7%	1	3.8%	26	100.0%
	L	11	42.3%	14	53.8%	1	3.8%	26	100.0%
機械系 集計		25	41.7%	33	55.0%	2	3.3%	60	100.0%
電気・電子系	H	1	25.0%	2	50.0%	1	25.0%	4	100.0%
	M	8	42.1%	10	52.6%	1	5.3%	19	100.0%
	L	11	37.9%	15	51.7%	3	10.3%	29	100.0%
電気・電子系 集計		20	38.5%	27	51.9%	5	9.6%	52	100.0%
理学(数学・化学)系	H	1	10.0%	8	80.0%	1	10.0%	10	100.0%
	M	1	5.6%	14	77.8%	3	16.7%	18	100.0%
	L		0.0%	3	100.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		2	6.5%	25	80.6%	4	12.9%	31	100.0%
上記全学部・学科		57	16.2%	259	73.8%	35	10.0%	351	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

この項目では、卒論の審査にあたって、明文化された基準があるか否かを質問したが、工学部機械系学科 41.7%、電気・電子系学科 38.5%でチェックシートがあると回答があった。これに対して、理学部 2 学科 6.5%、経済・経営・商学系学部 6.0%、法学部に至っては 1.7%しかチェックシートある学部はなかったのである。低い学科ほど、教員の主観や経験値を基にして審査されていることを示しており、この学系ごとの差が示している意味は大きいと思われる。

⑤卒論発表会の有無

学系	入試偏差 値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	卒論発表会が 行われる		卒論発表会が 行われていない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	7	19.4%	25	69.4%	4	11.1%	36	100.0%
	M	8	16.3%	40	81.6%	1	2.0%	49	100.0%
	L	21	32.8%	39	60.9%	4	6.3%	64	100.0%
経済・経営・商学系 集計		36	24.2%	104	69.8%	9	6.0%	149	100.0%
法学系	H	2	9.1%	14	63.6%	6	27.3%	22	100.0%
	M	2	9.1%	18	81.8%	2	9.1%	22	100.0%
	L	1	6.7%	11	73.3%	3	20.0%	15	100.0%
法学系 集計		5	8.5%	43	72.9%	11	18.6%	59	100.0%
機械系	H	7	87.5%		0.0%	1	12.5%	8	100.0%
	M	25	96.2%	1	3.8%		0.0%	26	100.0%
	L	26	100.0%		0.0%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		58	96.7%	1	1.7%	1	1.7%	60	100.0%
電気・電子系	H	4	100.0%		0.0%		0.0%	4	100.0%
	M	17	89.5%	2	10.5%		0.0%	19	100.0%
	L	28	96.6%	1	3.4%		0.0%	29	100.0%
電気・電子系 集計		49	94.2%	3	5.8%		0.0%	52	100.0%
理学(数学・化学)系	H	8	80.0%	1	10.0%	1	10.0%	10	100.0%
	M	12	66.7%	4	22.2%	2	11.1%	18	100.0%
	L	3	100.0%		0.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		23	74.2%	5	16.1%	3	9.7%	31	100.0%
上記全学部・学科		171	48.7%	156	44.4%	24	6.8%	351	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

工学部機械系学科 96.7%、電気・電子系学科 94.2%と、ほとんどの学科で卒論発表会が行われ、理学部 2 学科でも 74.2%で開催されている。これに対して経済・経営・商学系学部では 24.2%にとどまり法学部に至っては 8.5%しか開かれていない。

従って、次頁からの「卒論発表会が行われる」場合に限定した統計データ⑥，⑦，⑧については、法学部を除外した。

⑥卒論発表会が行われる場合の全員の口頭発表の有無、および成績への反映

＜全員の口頭発表の有無＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	口頭発表がある		口頭発表は 行われていない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	2	28.6%	4	57.1%	1	14.3%	7	100.0%
	M	2	25.0%	3	37.5%	3	37.5%	8	100.0%
	L	12	57.1%	8	38.1%	1	4.8%	21	100.0%
経済・経営・商学系 集計		16	44.4%	15	41.7%	5	13.9%	36	100.0%
機械系	H	7	100.0%		0.0%		0.0%	7	100.0%
	M	23	92.0%	1	4.0%	1	4.0%	25	100.0%
	L	26	100.0%		0.0%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		56	96.6%	1	1.7%	1	1.7%	58	100.0%
電気・電子系	H	4	100.0%		0.0%		0.0%	4	100.0%
	M	17	100.0%		0.0%		0.0%	17	100.0%
	L	28	100.0%		0.0%		0.0%	28	100.0%
電気・電子系 集計		49	100.0%		0.0%		0.0%	49	100.0%
理学(数学・化学)系	H	8	100.0%		0.0%		0.0%	8	100.0%
	M	11	91.7%	1	8.3%		0.0%	12	100.0%
	L	3	100.0%		0.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		22	95.7%	1	4.3%		0.0%	23	100.0%

※ 左数値＝データ件数／右数値＝比率

＜発表会が行われる場合の
成績への反映＞

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	成績に反映される		成績に反映されない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	2	100.0%		0.0%		0.0%	2	100.0%
	M	2	100.0%		0.0%		0.0%	2	100.0%
	L	10	83.3%	2	16.7%		0.0%	12	100.0%
経済・経営・商学系 集計		14	87.5%	2	12.5%		0.0%	16	100.0%
機械系	H	6	85.7%	1	14.3%		0.0%	7	100.0%
	M	19	82.6%	4	17.4%		0.0%	23	100.0%
	L	18	69.2%	7	26.9%	1	3.8%	26	100.0%
機械系 集計		43	76.8%	12	21.4%	1	1.8%	56	100.0%
電気・電子系	H	3	75.0%		0.0%	1	25.0%	4	100.0%
	M	13	76.5%	2	11.8%	2	11.8%	17	100.0%
	L	26	92.9%	2	7.1%		0.0%	28	100.0%
電気・電子系 集計		42	85.7%	4	8.2%	3	6.1%	49	100.0%
理学(数学・化学)系	H	6	75.0%	2	25.0%		0.0%	8	100.0%
	M	6	54.5%	3	27.3%	2	18.2%	11	100.0%
	L	2	66.7%	1	33.3%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		14	63.6%	6	27.3%	2	9.1%	22	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

卒論発表会が行われる学部・学科で全員の口頭発表が行われる割合は、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）、理学部 2 学科ともほぼ 100%であるのに対し、経済・経営・商学系学部が 44.4%にとどまっている。

また、その口頭発表が行われる学部・学科に成績に反映されるかを問うたところ、各学系とも 3 分の 2 以上で反映されるとの回答があった。学系によっての有意な差は認められなかった。

⑦卒論発表会が行われる場合の全員参加のポスターセッション

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	ポスターセッションがある		ポスターセッションは行っていない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H		0.0%	6	85.7%	1	14.3%	7	100.0%
	M	1	12.5%	4	50.0%	3	37.5%	8	100.0%
	L	1	4.8%	19	90.5%	1	4.8%	21	100.0%
経済・経営・商学系 集計		2	5.6%	29	80.6%	5	13.9%	36	100.0%
機械系	H	1	14.3%	6	85.7%		0.0%	7	100.0%
	M	3	12.0%	21	84.0%	1	4.0%	25	100.0%
	L	2	7.7%	24	92.3%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		6	10.3%	51	87.9%	1	1.7%	58	100.0%
電気・電子系	H		0.0%	4	100.0%		0.0%	4	100.0%
	M		0.0%	17	100.0%		0.0%	17	100.0%
	L	2	7.1%	26	92.9%		0.0%	28	100.0%
電気・電子系 集計		2	4.1%	47	95.9%		0.0%	49	100.0%
理学(数学・化学)系	H		0.0%	8	100.0%		0.0%	8	100.0%
	M	3	25.0%	9	75.0%		0.0%	12	100.0%
	L		0.0%	3	100.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		3	13.0%	20	87.0%		0.0%	23	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

⑧卒論発表会が行われる場合の優秀論文の発表会

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0～ 55.0	優秀論文の発表がある		優秀論文の発表は行っていない		未記入		総計	
経済・経営・商学系	H	4	57.1%	2	28.6%	1	14.3%	7	100.0%
	M	3	37.5%	2	25.0%	3	37.5%	8	100.0%
	L	9	42.9%	11	52.4%	1	4.8%	21	100.0%
経済・経営・商学系 集計		16	44.4%	15	41.7%	5	13.9%	36	100.0%
機械系	H		0.0%	7	100.0%		0.0%	7	100.0%
	M	1	4.0%	23	92.0%	1	4.0%	25	100.0%
	L	1	3.8%	25	96.2%		0.0%	26	100.0%
機械系 集計		2	3.4%	55	94.8%	1	1.7%	58	100.0%
電気・電子系	H		0.0%	4	100.0%		0.0%	4	100.0%
	M		0.0%	17	100.0%		0.0%	17	100.0%
	L		0.0%	28	100.0%		0.0%	28	100.0%
電気・電子系 集計			0.0%	49	100.0%		0.0%	49	100.0%
理学(数学・化学)系	H		0.0%	8	100.0%		0.0%	8	100.0%
	M	1	8.3%	11	91.7%		0.0%	12	100.0%
	L		0.0%	3	100.0%		0.0%	3	100.0%
理(数学・化学)系 集計		1	4.3%	22	95.7%		0.0%	23	100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

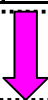
卒論発表会が行われる学部・学科で、ポスターセッションや優秀論文発表会があるか質問した。経済・経営・商学系学部では44.4%が優秀論文の発表会を開催していたが、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）、理学部2学科とも極めて低い数値を示した。

(3) 1 年次ゼミにおけるレポートの返却と教員によるコメントの有無

(3)-(i) <1 年前期: レポート必須の有無>

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0~ 55.0	学部で必須	学科で必須	教員裁量	教育課題でない	未把握	未記入	総計
経済・経営・商学系	H	4 11.1%	3 8.3%	22 61.1%	1 2.8%	0.0%	6 16.7%	36 100.0%
	M	19 38.8%	2 4.1%	17 34.7%	0.0%	3 6.1%	8 16.3%	49 100.0%
	L	26 40.6%	0.0%	26 40.6%	1 1.6%	2 3.1%	9 14.1%	64 100.0%
経済・経営・商学系 集計		49 32.9%	5 3.4%	65 43.6%	2 1.3%	5 3.4%	23 15.4%	149 100.0%
法学系	H	1 4.5%	3 13.6%	14 63.6%	0.0%	1 4.5%	3 13.6%	22 100.0%
	M	1 4.5%	2 9.1%	16 72.7%	0.0%	0.0%	3 13.6%	22 100.0%
	L	5 33.3%	2 13.3%	5 33.3%	0.0%	1 6.7%	2 13.3%	15 100.0%
法学系 集計		7 11.9%	7 11.9%	35 59.3%	0.0%	2 3.4%	8 13.6%	59 100.0%
機械系	H	0.0%	4 50.0%	1 12.5%	0.0%	0.0%	3 37.5%	8 100.0%
	M	0.0%	11 42.3%	2 7.7%	2 7.7%	1 3.8%	10 38.5%	26 100.0%
	L	0.0%	9 34.6%	8 30.8%	2 7.7%	0.0%	7 26.9%	26 100.0%
機械系 集計		0.0%	24 40.0%	11 18.3%	4 6.7%	1 1.7%	20 33.3%	60 100.0%
電気・電子系	H	0.0%	2 50.0%	1 0.0%	0.0%	0.0%	2 50.0%	4 100.0%
	M	0.0%	7 36.8%	2 10.5%	0.0%	0.0%	10 52.6%	19 100.0%
	L	0.0%	12 41.4%	11 37.9%	0.0%	1 3.4%	5 17.2%	29 100.0%
電気・電子系 集計		0.0%	21 40.4%	13 25.0%	0.0%	1 1.9%	17 32.7%	52 100.0%
理学(数学・化学)系	H	0.0%	1 10.0%	5 50.0%	0.0%	0.0%	4 40.0%	10 100.0%
	M	0.0%	2 11.1%	7 38.9%	2 11.1%	0.0%	7 38.9%	18 100.0%
	L	0.0%	1 33.3%	1 33.3%	0.0%	0.0%	1 33.3%	3 100.0%
理(数学・化学)系 集計		0.0%	4 12.9%	13 41.9%	2 6.5%	0.0%	12 38.7%	31 100.0%
総計		56 16.0%	61 17.4%	137 39.0%	8 2.3%	9 2.6%	80 22.8%	351 100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率



(3)-(ii) <1 年前期: レポート必須の場合の返却必須の有無>

学系	入試偏差値 H:55.0以上 M:45.0~ 55.0	返却必須	教員裁量	返却しない	未記入	総計
経済・経営・商学系	H	1 14.3%	6 85.7%	0.0%	0.0%	7 100.0%
	M	4 19.0%	14 66.7%	1 4.8%	1 9.5%	21 100.0%
	L	11 42.3%	14 53.8%	0.0%	1 3.8%	26 100.0%
経済・経営・商学系 集計		16 29.6%	34 63.0%	1 1.9%	3 5.6%	54 100.0%
法学系	H	1 25.0%	3 75.0%	0.0%	0.0%	4 100.0%
	M	0.0%	3 100.0%	0.0%	0.0%	3 100.0%
	L	2 28.6%	5 71.4%	0.0%	0.0%	7 100.0%
法学系 集計		3 21.4%	11 78.6%	0.0%	0.0%	14 100.0%
機械系	H	0.0%	2 50.0%	2 50.0%	0.0%	4 100.0%
	M	3 27.3%	5 45.5%	2 18.2%	1 9.1%	11 100.0%
	L	2 22.2%	4 44.4%	3 33.3%	0.0%	9 100.0%
機械系 集計		5 20.8%	11 45.8%	7 29.2%	1 4.2%	24 100.0%
電気・電子系	H	0.0%	2 100.0%	0.0%	0.0%	2 100.0%
	M	5 71.4%	2 0.0%	2 28.6%	0.0%	7 100.0%
	L	4 33.3%	5 41.7%	1 8.3%	2 16.7%	12 100.0%
電気・電子系 集計		9 42.9%	7 33.3%	3 14.3%	2 9.5%	21 100.0%
理学(数学・化学)系	H	0.0%	1 100.0%	0.0%	0.0%	1 100.0%
	M	0.0%	2 100.0%	0.0%	0.0%	2 100.0%
	L	1 100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1 100.0%
理(数学・化学)系 集計		1 25.0%	3 75.0%	0.0%	0.0%	4 100.0%
総計		34 29.1%	66 56.4%	11 9.4%	6 5.1%	117 100.0%

※左数値＝データ件数／右数値＝比率

表(3)-(i)は、1 年前期の初年次ゼミにおいて、レポート提出が必須であるか否かを質問したものである。この表の中の「学部で必須」「学科で必須」と回答した学部・学科を対象として「レポートの返却必須の有無」を質問した。その回答が表(3)-(ii)である。

レポートを返却必須と回答したのは全学系合計で 34 学部・学科であり、学系別に見ると工学部電気・電子系学科で 42.9%、他の学系ではすべて返却必須が 20%台の回答であった。しかもその返却必須の場合、コメント必須としたのは全学系を合わせて 17 学部・学科であった。つまり、調査対象 351 学部・学科の内、初年次ゼミ前期でレポートの返却が必須で、且つ教員のコメントが必須とされているのはわずか 17 学部・学科しかない。その率たるや 5%未満なのである。この点は、大いに留意されてしかるべきである。

なお、1 年後期についても同様の質問をしたが前期と大差がないため報告は割愛する。

【Ⅲ】実地評価の概要

1. 実地評価の対象学部・学科の抽出

質問紙調査による各学部・学科の獲得ポイントに基づいて、実地評価対象学部・学科を抽出した。抽出に当たっては、基本的に質問紙調査によるポイントの高い学部学科から抽出していったが、以下の例外を設けた。

①4年間の中でポイントが0の学年を含む学部・学科に関しては除外した。

②公開されている教育GP等の資料を参考にすることで、質問紙でポイントが出ていない学部・学科にも実地調査を行った。(対象 東京大学工学部機械情報工学科 香川大学経済学部)

こうして実際に抽出した学部学科は以下の通りである。

<経済・経営・商学系学部>

函館大学(商学部)、東日本国際大学(経営情報学部)、千葉商科大学(サービス創造学部)、嘉悦大学(経営経済学部)、産業能率大学(経営学部)、創価大学(経営学部)、創価大学(経済学部)、武蔵大学(経済学部)、立教大学(経営学部)、中京大学(経済学部)、立命館大学(経営学部)、龍谷大学(経済学部)、流通科学大学(サービス産業学部)、和歌山大学(経済学部)、香川大学(経済学部)、宮崎産業経営大学(経営学部) 合計 16 学部

<工学部機械・電気・電子系学科>

北見工業大学(工学部機械工学科)、室蘭工業大学(工学部情報電子工学系学科)、秋田大学(工学資源学部機械工学科)、秋田大学(工学資源学部電気電子工学科)、日本大学(生産工学部電気電子工学科)、東京大学(工学部機械情報工学科)、東京都市大学(工学部電気電子工学科)、新潟大学(工学部機械システム工学科)、金沢大学(理工学域機械工学類)、金沢工業大学(工学部電気電子工学科／機械工学科)、三重大学(工学部電気電子工学科)、京都工芸繊維大学(工芸科学部機械システム工学課程)、大阪工業大学(工学部機械工学科)、近畿大学(理工学部機械工学科)、岡山大学(工学部機械工学科)、九州工業大学(工学部機械知能工学科)、九州産業大学(工学部電気情報工学科)、福岡工業大学(工学部電気工学科)、宮崎大学(工学部電気電子工学科) 合計 19 学科

注1) 金沢工業大学は電気電子工学科と機械工学科の2学科を調査したが取り組み内容がほぼ同じであるため、1学科としてカウントした。

注2) 東京大学(工学部機械情報工学科)は採点できるだけの情報が収集できなかったため、コメントのみの掲載とした。

2. 実地調査における評価ポイント

(1) 評価基準の設計

《評価の視点：Ⅰ》においては、一般的アクティブラーニング、高次のアクティブラーニング、産学連携のアクティブラーニングの導入度とそれぞれに関係する「知識」の活用度を評価した。

《評価の視点：Ⅱ》においては、アクティブラーニングが教員の恣意に委ねられるのではなく、いかにチームティーチングによって一定レベル以上の水準が担保されているのか、を評価した。ただし、経済・経営・商学系学部においては、アクティブラーニングに限定すると評価が成立しない学部が多いため、一部、アクティブラーニングだけではなくすべての科目を対象とした評価も含むこととした。一方、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では学年をまたぐアクティブラーニングのチームティーチングを高く評価した。

《評価の視点：Ⅲ》においては、学生の自律・自立化を促すための取り組みを問題としている。自律・自立化を促すためには、大学は学生が身につけるべき能力要素を明示し、それをカリキュラムや科目の中で学生が自らチェックできるようにしていく必要がある。また、学生が自ら目標設定し、それを振り返り、次の目標に活かしていく、即ち PDCA サイクルを自ら回していけるように援助する取り組みが重要である。

(2)評価基準

【工学部 機械・電気・電子系学科の実地評価基準 (25 点満点)】

(下記に該当しない場合は 0 点として評価する)

評価の視点Ⅰ：アクティブラーニングそのものについての評価 (配点 17 点)

(1) 4 年間を通じたアクティブラーニング (配点 4 点)

① 4 年間を通じたアクティブラーニングの導入度 (配点 2 点)

点 数	内 容
2	経済・経営・商学系学部中、質問紙での得点が上位 3 分の 1 である。
1	経済・経営・商学系学部中、質問紙での得点が中位 3 分の 1 である。

② 一般的アクティブラーニングにおける知識定着・確認の度合 (配点 2 点)

※ 授業で必ず演習が行われるという理由で情報系科目は除く。

点 数	内 容
2	専門および専門基礎の複数の基本的な科目 (機械系学科では 4 力学、電気・電子系学科では電磁気・電気回路等) において、実験・演習等が意識的に講義と同時期に開講され連携が図られている (半数以上が目安)。または専門の複数の基本的な科目において、講義科目の中で演習等の AL が行われる決まりになっている (半数以上が目安)。
1	専門および専門基礎の基本的な科目において、一部の科目 (半数以下が目安) で実験・演習等が意識的に講義と同時期に開講され連携が図られている。または専門の複数の基本的な科目において、講義科目の中で演習等の AL が行われる決まりになっている。

(2) 高次のアクティブラーニング (配点 9 点)

※ 高次のアクティブラーニングには「卒論」と「PBL・創成授業」の二種類があると定義する。

① 高次のアクティブラーニングの導入度 (配点 5 点)

点 数	内 容
4	「PBL・創成授業」が、必須を含み 3 年間連続して置かれている。
3	「PBL・創成授業」が、選択で 3 年間連続して置かれている。または 2 つの学年必須で置かれている。
2	「PBL・創成授業」が、選択で 2 年間置かれている。または 1 つの学年で必須で置かれている。
1	「PBL・創成授業」が、選択で 1 つの学年に置かれている。

★ 学科で卒論が必須であれば、上記の得点に 1 点加算する。

② 高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度 (配点 4 点)

卒論は専門知識を前提としているが故に、ここでは「PBL・創成授業」のみを対象とする。「PBL・創成授業」についても、設問 (1) と連動して、初年次のみに設置されているケースは評価しない。

理由は、「PBL・創成授業」の導入の意義は、知識の習得とその活用を 3～4 年間を通じて行ったり来たりすることとあり、初年次のみに優れた「PBL・創成授業」と知識の活用が導入されていても、それを連続しないのでは評価に値しないからである。

点 数	内 容
2	「PBL・創成授業」が知識の活用を強く意識し、シラバスや授業計画書に明記するなど具体的に連携した設計となっている。
1	「PBL・創成授業」が知識の習得を前提とした設計となっている。

★ 上記が、全員必須の科目で行われている場合、上記の得点に 2 を乗じる (選択科目の場合は 1 を乗じる)。

(3) 産学連携のアクティブラーニング (配点 4 点)

① インターンシップの導入度 (配点 2 点)

点 数	内 容
-----	-----

2	単位化されているインターンシップが必修科目で設定されている。
1	単位化されているインターンシップが選択科目で設定されている。

② 産学連携での高次のアクティブラーニングの導入度（配点2点）

点 数	内 容
2	全員必修の科目で産学連携のHALが行われている。
1	選択科目で産学連携のHALが行われている。

評価の視点Ⅱ：学部学科による質保証 実施主体の体制、教育内容を統一するためのチームティーチング・FD活動（配点：4点）

（1）アクティブラーニング科目の複数教員（配点1点）

点 数	内 容
1	AL科目において、学部・学科で同じ科目名を複数の教員が担当し、教育内容が学部・学科主導で統一されている。

（2）学年をまたぐアクティブラーニング科目の複数教員（配点1点）

点 数	内 容
1	学年をまたぐAL科目を複数の教員が担当し、教育内容が学部・学科主導で統一されている。

（3）学年をまたぐ高次のアクティブラーニング科目の複数教員（配点2点）

点 数	内 容
2	学年をまたぐ高次のアクティブラーニング科目の全体でチームティーチングが行われている。
1	学年をまたぐ高次のアクティブラーニング科目の一部でチームティーチングが行われている。

評価の視点Ⅲ：学生の能力形成と自律・自立化（配点4点）

（1）獲得させるべき能力と対応したアクティブラーニングを含んだカリキュラム設計（配点2点）

点 数	内 容
2	シラバスなどで、各科目の中に獲得させるべき能力要素が落としこまれている。
1	シラバスなどで、各科目が獲得させるべき能力の中に分類されている。

（2）振り返りとコミットメント（配点：2点）

点 数	内 容
2	学生にPDCAサイクルを回させる仕組みになっている。
1	何らかの振り返りを行わせる具体物がある。または一部の学生に対してのみPDCAの仕組みがある。

【経済・経営・商学系学部の実地評価基準（25 点満点）】

（下記に該当しない場合は 0 点として評価する）

評価の視点Ⅰ：アクティブラーニングそのものについての評価（配点 17 点）

（1）4 年間を通じたアクティブラーニング（配点 4 点）

① 4 年間を通じたアクティブラーニングの導入度（配点 2 点）

点 数	内 容
2	経済・経営・商学系学部中、質問紙での得点が上位 3 分の 1 である。
1	経済・経営・商学系学部中、質問紙での得点が中位 3 分の 1 である。

② 一般的アクティブラーニングにおける知識定着・確認の度合（配点 2 点）

※ 授業で必ず演習が行われるという理由で情報系科目と簿記系の科目は除外する簿記科目は除く。

点 数	内 容
2	演習等の GAL と講義科目の連携が図られている科目が複数ある。または講義科目の中に演習や討議等の AL を組み込むことが、学部として指定されている科目が複数ある（教員裁量ではない）。
1	演習等の GAL と講義科目の連携が図られている科目が 1 つある。または講義科目の中に演習や討議等の AL を組み込むことが、学部として指定されている科目が 1 つある（教員裁量ではない）。

（2）高次のアクティブラーニング（配点 9 点）

※ 高次のアクティブラーニングには「卒論」と「PBL・創成授業」の二種類があると定義する。

① 高次のアクティブラーニングの導入度（配点 5 点）

点 数	内 容
4	「PBL・創成授業」が、必須を含み 3 年間連続して置かれている。
3	「PBL・創成授業」が、選択で 3 年間連続して置かれている。または 2 つの学年必須で置かれている。
2	「PBL・創成授業」が、選択で 2 年間置かれている。または 1 つの学年で必須で置かれている。
1	「PBL・創成授業」が、選択で 1 つの学年に置かれている。

★ 学科で卒論が必須であれば、上記の得点にさらに 1 点加算する。

② 高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度（配点 4 点）

卒論は専門知識を前提としているが故に、ここでは「PBL・創成授業」のみを対象とする。「PBL・創成授業」についても、設問（1）と連動して、初年次のみに設置されているケースは評価しない。

理由は、「PBL・創成授業」の導入の意義は、知識の習得とその活用を 3～4 年間を通じて行ったり来たりすることにあり、初年次のみに優れた「PBL・創成授業」と知識の活用が導入されていても、それを連続しないのでは評価に値しないからである。

点 数	内 容
2	「PBL・創成授業」が知識の活用を強く意識し、シラバスや授業計画書に明記するなど具体的に連携した設計となっている。
1	「PBL・創成授業」が知識の習得を前提とした設計となっている。

★ 上記が、全員必須の科目で行われている場合、上記の得点に 2 を乗じる（選択科目の場合は 1 を乗じる）。

(3) 産学連携のアクティブラーニング (配点 4 点)

① インターンシップの導入度 (配点 2 点)

点 数	内 容
2	単位化されているインターンシップが必修科目で設定されている。
1	単位化されているインターンシップが選択科目で設定されている。

② 産学連携での高次のアクティブラーニングの導入度 (配点 2 点)

点 数	内 容
2	全員必修の科目で産学連携の H A L が行われている。
1	選択科目で産学連携の H A L が行われている。

評価の視点Ⅱ：学部学科による質保証 実施主体の体制、教育内容を統一するためのチームティーチング・FD活動 (配点 4 点)

(1) 同一科目の複数教員 (配点 1 点)

点 数	内 容
1	AL に限らず、学部・学科で同じ科目を複数の教員が担当する場合、教育内容が学部・学科主導で統一されている。

(2) 2 セメスター以上にまたがる積み上げ科目の複数教員 (配点 1 点)

点 数	内 容
1	AL に限らず、2 セメスター以上にまたがる積み上げ型科目で複数の教員が担当する場合、教育内容が学部・学科主導で統一されている。

(3) アクティブラーニング科目の複数教員 (配点 2 点)

点 数	内 容
2	AL 科目のうち、1 科目に対して複数の教員が関わり、チームティーチングを行っている科目が複数ある。
1	AL 科目のうち、1 科目に対して複数の教員が関わり、チームティーチングを行っている科目が 1 つある。
0	AL 科目には、1 科目に対して複数の教員が関わり、チームティーチングを行っている科目がない。

評価の視点Ⅲ：学生の能力形成と自律・自立化 (配点 4 点)

(1) 獲得させるべき能力と対応したアクティブラーニングを含んだカリキュラム設計 (配点 2 点)

点 数	内 容
2	シラバスなどで、各科目の中に獲得させるべき能力要素が落としこまれている。
1	シラバスなどで、各科目が獲得させるべき能力の中に分類されている。

(2) 振り返りとコミットメント (配点 2 点)

点 数	内 容
2	学生に PDCA サイクルを回させる仕組みになっている。
1	何らかの振り返りを行わせる具体物がある。または一部の学生に対してのみ PDCA の仕組みがある。

.....

【IV】実地評価 項目別評価結果と取り組み紹介

1. 《評価の視点Ⅰ》アクティブラーニングそのものについての評価

工学部 19 学科の平均：11.7／17.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均：10.4／17.0 ポイント

(1) 4 年間を通じたアクティブラーニング

① 4 年間を通じたアクティブラーニングの導入度

工学部 19 学科の平均：1.9／2.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均：2.0／2.0 ポイント

この項目の評価基準は、質問紙α項目をポイント化したものを、各学系上位 3 分の 1 が 2 ポイント、中位 3 分の 1 が 1 ポイント、下位 3 分の 1 が 0 ポイントとした。量的な導入度をトータルな評価に組み入れるべきという観点からである。

もとより、実地評価の対象は基本的にポイントの高い学部・学科から抽出しているため、上記のような結果になっている。

② 一般的アクティブラーニングにおける知識定着・確認の度合

工学部 19 学科の平均：1.7／2.0 ポイント

経済・経営・商学系学部 16 学部の平均：1.4／2.0 ポイント

講義と一般的アクティブラーニングとの連携がどのように図られているのか、についてである。学生が一方向的に教員の話聞くだけの講義は、前に触れたラーニングピラミッドの説明でも明らかなように、知識の定着率も極めて低い。講義形式の、知識の伝達を目的とした講義であるからこそ、そこに知識の定着を図るアクティブラーニングがどのように導入されているのかに注目した。

■工学部機械系学科・電気・電子系学科

工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、演習等の一般的アクティブラーニングと講義科目の連携が図られている科目が四力学（機械系学科）、電磁気学・電気回路（電気・電子系学科）等の基本的科目の半数以上で、または講義科目の中に演習や討議等のアクティブラーニングを組み込むことが、学部として指定されている科目が半数以上ある（教員裁量ではない）場合に 2 ポイントとする。半数以下で複数科目ある場合には 1 ポイント、そうでない場合が 0 ポイントである。

この項目については、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、概ね基本的な科目での講義とアクティブラーニングの連携は図られていた。

機械系学科では熱力学、機械力学、流体力学、材料力学の「四力学」と呼ばれる基本的な科目群があり、これはどの大学でも全学生の必修とされている。また一般に、この四力学には上級科目が置かれている。電気・電子系学科では、この四力学に相当するのが電磁気学と電気回路で、やはり上級科目に連続する。実地調査した多くの機械系学科で、こうした四力学の科目が演習とセットとなっていた。電気・電子系学科でも然りであった。これには別コマ・別単位でセットになっているケース、別コマだが演習は単位認定しないケース、さらに同一コマ内で演習を行うケースと、組み合わせの形態は 3 つのパターンが見られたが、重要なことは講義と演習等の一般的アクティブラーニングが有機的に組み合わせられていることで、それが四力学や電磁気学・電気回路等の基本的科目の半数以上で行われている大学が大半であった。こうしたことは、2 学科の伝統であると思われる。

■経済・経営・商学系学部

経済・経営・商学系学部の場合は、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と比較して全般的にこの面での取り組みが遅れている。経済・経営・商学系学部内での差を見るために、評価基準を工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と異ならせている（工学部（機械系学科、電気・電子系学科）は演習とセットになっている科目が基本科目の半数以上で 2 ポイント、半数以下で 1 ポイントであるのに対し、経済・経営・商学系学部では演習とセットとなっている科目が複数あれば 2 ポイント、1 科目あれば 1 ポイント）。このため得点率で工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と単純比較することはできないが、基本科目と呼べるような科目の過半で演習がセットとなっている学部は極めて少ない。

確かに学問の性格上、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と比較すると、伝統的に演習と講義系の科目の連携は行われてこなかった面もあると思われる（なお、一般的アクティブラーニングとセットで行われるのが当然の情報リテラシー系科目と簿記系の科目は、この項目の対象からは除外した。それは本調査の趣旨が講義科目にどれだけアクティブラーニングを取り入れているのかをみるためである）。

しかし、当プロジェクトとしては、通常、講義科目で十分とされてきた知識伝達系が目的の科目においても、アクティブラーニングと結合することで、その学習効果が大きく高まる点にこそ注目する。その点で経済・経営・商学系学部の取り組みは、大きく遅れていると言うべきである。

その中でもいくつかの優れた取り組みをピックアップして紹介する。

(2) 高次のアクティブラーニング

① 高次のアクティブラーニングの導入度

② 高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度

工学部 19 学科の平均：①3.7／5.0 ポイント ②2.7／4.0 ポイント
--

経済・経営・商学系学部 16 学部の平均：①3.5／5.0 ポイント ②1.8／4.0 ポイント
--

この項目は、知識を活用する PBL や創成授業などの高次のアクティブラーニングが 4 年間を通じて、どれだけ配当されているかを問題とした。「①高次のアクティブラーニングの導入度」では高次のアクティブラーニングがどれだけ切れ目なく配当されているかを問題とし、さらに「②高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度」では高次のアクティブラーニングにおいて、どれだけ専門知識の活用が図られているかを問題とした。

高次のアクティブラーニングは、専門知識との結合がなければ、とすると、「お遊び」的なものに終始してしまうことになりがちであり、アイデアや思いつきに偏重するのではなく、そこに大学で学ぶ専門知識が活かされていなければならないという視点からである。

①については最高で 5 ポイント。そのうち、卒業論文について全員必須であれば、1 点を付加し、さらに 4 年次を除く学年で必修を含み 3 年間に高次のアクティブラーニングが置かれていれば 4 ポイントとして評価した。つまり、4 年間にわたり、切れ目なく高次のアクティブラーニングが配当され、そのうちの 1～3 年で必修科目を含み、かつ卒論が必須であると最高の 5 ポイントになる。

②については、「PBL・創成授業」が知識の活用を強く意識し、シラバスや授業計画書に明記するなど具体的に連携した設計となっている場合が 2 ポイント、「PBL・創成授業」が知識の習得を前提とした設計となっている場合が 1 ポイントである。そして、上記が全員必修科目で行われている場合、ポイントに 2 を乗じた（選択科目の場合は 1 を乗じた）。

そして、卒論は専門知識を前提としているが故にこの項目の対象とはせず、ここでは「PBL・創成授業」のみを対象とした。しかも「PBL・創成授業」が初年次のみに設置されているケースは評価しないこととした。理由は、「PBL・創成授業」の導入の意義は、知識の習得とその活用を 3～4 年間を通じて行ったり来たりすることにより、初年次のみに優れた「PBL・創成授業」と知識の活用が導入されていても、それを連続しないのでは評価に値しないという考えからである。

■工学部機械系学科・電気・電子系学科

この項目では、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）平均で「①高次のアクティブラーニングの導入度」が 3.6 ポイント、「②高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度」が 2.7 ポイントとなった。そのうち①では 5 学科で最高の 5 ポイントとなり、②では 9 学科で最高の 4 ポイントとなった。

■経済・経営・商学系学部

経済・経営・商学系学部のこの項目の平均ポイントは「①高次のアクティブラーニングの導入度」が 3.5、「②高次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度」が 1.8。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と比較して高次のアクティブラーニングの導入度合いは、やや低い。

①については 3 学部が最高の 5 ポイントとなり、②については 2 学部が最高の 4 ポイントとなった。

(3)産学連携のアクティブラーニング

①インターンシップの導入度

②産学連携での高次のアクティブラーニングの導入度

工学部 19 学科の平均：①1.1／2.0 ポイント ②0.7／2.0 ポイント
--

経済・経営・商系 16 学部の平均：①0.9／2.0 ポイント ②0.9／2.0 ポイント

この項目では、産学連携の在り方を評価した。「①インターンシップの導入度」はインターンシップがどのように行われているかであり、学生全員に必修で課されている場合は 2 ポイント、選択で単位化されている場合は 1 ポイントとした。

「②産学連携での高次のアクティブラーニングの導入度」は、産学連携での高次のアクティブラーニングがどれだけ導入されているかを評価したもので、全員必修の科目で行われていれば 2 ポイント、選択科目の場合は 1 ポイントとした。

①インターンシップの導入度について

この項目については、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と経済・経営・商学系学部と一緒に紹介する。

①については、今回実地調査したすべての学部・学科で単位化されていた。参加率は数%から 100%まで幅が広く、実地評価の対象学部・学科ではおしなべて 10～30%であった。実地評価学部・学科の中で全員にインターンシップを必修で課しているのは、日本大学生産工学部電気電子工学科のみであった。

②産学連携での高次のアクティブラーニングの導入度について

②については、産学連携で高次のアクティブラーニングに取り組ませているか、である。上記①の東京大学工学部機械情報学科のインターンシップは、これに該当する。他では産学連携での高次のアクティブラーニングを設けて取り組んでいる場合が多かった。

2.《評価の視点Ⅱ》学部学科による質保証 実施主体の体制、教育内容を統一するための チームティーチング・FD 活動

工学部 19 学科の平均：2.2／4.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均：2.7／4.0 ポイント

ここではアクティブラーニングが教員の恣意に委ねられるのではなく、いかに学部・学科によって一定レベル以上の水準が担保されているのかを評価した。観点は（１）、（２）、（３）とあるが、経済・経営・商学系学部においては、アクティブラーニングに限定すると評価が成立しない学部が多いため、（１）および（２）の観点ではアクティブラーニングだけではなくすべての科目を対象とした。

また観点（３）でも、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では「学年をまたぐ高次のアクティブラーニング」を対象としたのに対し、経済・経営・商学系学部では「アクティブラーニング科目のうち複数の教員が関わる」科目を対象とした。

全体として、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）は学科としてのチームティーチングが前提であることが判明した。基本的には、講義系の科目でも、「科目に人がつく」のがスタンダードである。学科として「この科目で何を教えるのか」が討議・決定され、それを人が分担する在り方が一般的であって、「人に科目がつく」、つまり教える内容は教員に委ねられているのは専門ゼミ以外にはほとんどない、というのが現状である。これは、講義系科目、一般的アクティブラーニングを含む科目、高次のアクティブラーニングを含む科目ともに該当する事柄である。これに対して経済・経営・商学系学部では、この項目でのバラつきが多い。

（１）アクティブラーニング全般において、学科で同じ科目名を複数の教員が担当し、教育内容が学科主導で統一されている（工学部）

工学部 19 学科の平均：1.0／1.0 ポイント

アクティブラーニングに限らず、学部で同じ科目名を複数の教員が担当し、教育内容が学部主導で統一されている（経済・経営・商学部）

経済・経営・商系 16 学部の平均：0.9／1.0 ポイント

工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、ほとんどの学部で1ポイントとなった。つまり、高次と一般的を問わずアクティブラーニングが導入されている場合、工学部では基本的に統一シラバスや内容の統一がされているのがごく一般的であった。

これに対し、経済・経営・商学系学部では、そもそもアクティブラーニングに限らず、同一科目で複数の教員による複数コマ開講の場合の内容統一を対象としたため、0.9 ポイントと高くなっているが工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と意味は異なる。しかし、「ミクロ経済学」、「マクロ経済学」等の科目において15学部で内容統一が行われていた。

（２）学年をまたぐアクティブラーニング科目を複数の教員が担当し、教育内容が学科主導で統一されている（工学部）

工学部 19 学科の平均：0.7／1.0 ポイント

アクティブラーニングに限らず、2セメスター以上にまたがる積み上げ型科目で複数の教員が担当し、教育内容が学部主導で統一されている（経済・経営・商学部）

経済・経営・商系 16 学部の平均：0.5／1.0 ポイント

工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、多くの学科で1ポイントとなった。つまり、高次と一般的を問わずアクティブラーニングがセメスターをまたいで導入されている場合、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では基本的に統一シラバスや内容の調整がなされているのがごく一般的であった。

これに対し、経済・経営・商学系学部では、そもそもアクティブラーニングに限らず、積み上げ型の科目で内容調整が行われているかを対象としたが、「ミクロ経済学」、「マクロ経済学」等とその上級科目との間について8学部で内容統一が行われているにとどまった。

(3) 学年をまたぐ高次のアクティブラーニング科目でチームティーチングが行われている(工学部)

工学部 19 学科の平均：0.5／2.0 ポイント

アクティブラーニング科目でチームティーチングが行われている(経済・経営・商学部)

経済・経営・商系 16 学部の平均：1.3／2.0 ポイント

工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、学年をまたぐ高次のアクティブラーニングが設定されている場合には、ほぼすべてでチームティーチングが導入されていた。ただ、「学年をまたぐ高次のアクティブラーニング」が導入されておらず、該当しないケースも少なからず存在した。

経済・経営・商学系学部では、アクティブラーニング科目のうち、1科目に対して複数の教員が関わりチームティーチングが行われているかを評価したため、工学部よりポイント高くなっている。アクティブラーニングが導入されている初年次ゼミなどでは、1科目に複数の教員が関わり、不断に内容調整されるチームティーチングが導入されている学部も少なくない。ただ、初年次ゼミの内容は教員任せとなっている学部もあった。

概して、《評価の視点Ⅱ》の項目については、高次のアクティブラーニングの導入が進んでいる学部・学科ほど高いポイントを表しており、相関関係が明瞭である。

3.《評価の視点Ⅲ》学生の能力形成と自律・自立化

工学部 19 学科の平均：2.1／4.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均：1.3／4.0 ポイント

この項目においては、学生の自律・自立化を促すための取り組みを問題としている。

「(1) 獲得させるべき能力と対応した AL を含んだカリキュラム設計」では、カリキュラムおよび個々の科目が能力要素別に分類・設計されているかどうかを評価した。評価基準は、能力要素別に科目が分類され、「○○の能力を育てるためには、○○の科目を履修すればよい」と分かるようになっていれば1ポイントとし、さらに、その能力要素が科目に落とし込まれている場合には2ポイントとした。後者の場合は、シラバスを読めば、その科目で複数の能力形成がどのように目的として組み入れられているのかが分かることがポイントである。

「(2) 振り返りとコミットメント」では、振り返りシートやポートフォリオ等を用いて、学生が PDCA サイクルを回せるような習慣を身につけさせているかを評価した。何らかの具体物（シート）等が存在し、学生に取り組ませて入れば1ポイント。さらに、学生が PDCA を回せるようにするための仕掛けや教員の労力が必要な仕組みがあれば2ポイントとした。

(1)獲得させるべき能力と対応した AL を含んだカリキュラム設計

工学部 19 学科の平均：1.1／2.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均：0.4／2.0 ポイント

この項目は、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、最低でも1ポイントが確保されていた。実地調査対象19学科の内13学科が JABEE 認定コースを設けており、学科として JABEE に対応した能力要素別の科目編成が行われていた。学生に獲得させるべき能力＝教育目標を以下の a～h に分類する。

(a)地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養

(b)技術が社会および自然におよぼす影響・効果に関する理解力や責任など、技術者として社会に対する責任を自覚する能力（技術者倫理）

(c)数学，自然科学，情報技術に関する知識とそれらを応用できる能力

(d)該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを問題解決できる能力

(e)種々の科学・技術・情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力

(f)日本語による論理的な記述力，口頭発表力，討議などのコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力

(g)自主的，継続的に学習できる能力

(h)与えられた制約の下で計画的に仕事を進め，まとめる能力

そのうえで、(a)の能力を身につけるには、どの科目とどの科目を取れば良いのかが示されるのが一般的である。

このうち、金沢工業大学電気電子工学科と福岡工業大学電気工学科においては、その能力要素が各科目まで落とし込まれていた。当たり前のことであるが、1つの科目は1つの教育目標のみに対応しているわけではない。たとえば(a)と(d)と(h)の複数を教育目標とし、しかも(a)，(d)，(h)のそれぞれに比重が異なるという在り方をする。それをシラバスに明示して、「この科目を取ると、これこれの能力要素が身につく」と学生にも分かるようになっているのが、上記の2大学・学科であった。

平成22年度 学習支援計画書

両面紙を使用しています。

授業科目区分		科目名		単位	科目コード	開講時期	履修条件		
修学基礎教育課程 修学基礎科目 修学基礎	コアガイド (EM) Introduction to Major		1	0005-01	4期 (後学期)	修学規程第5条別表第2を参照			
担当教員名		研究室	内線電話番号	電子メールID			オフィスアワー		
授業科目の学習教育目標									
キーワード		学習教育目標							
1	専門領域と専門基礎科目	機械系専門領域に対応した専門コア科目の位置づけや科目フローを理解し、今後取り組む専門領域を決める。また、機械工学では線形代数、微積分学等の応用能力と確率・統計の基礎を含む数学、並びに物理学の基礎に関する自然科学の知識を実践的に修得する必要があることから、ここでは「確率・統計の基礎」を主として取りあげ、講義と演習および小テストを実施し、理解度の自己点検・評価を行う。さらに、これまでに履修した科目の自己点検を行い、プロジェクトデザインⅢをも視野に入れた履修計画と学習計画を立案する。							
2	プロジェクトデザインⅢ								
3	専門領域推奨科目								
4	学習・履修計画								
5	確率・統計の基礎								
授業の概要および学習上の助言									
1. 数理工基礎科目、専門基礎科目の学習に対する総合的自己点検・評価 これまでに学習した内容の確認と理解度（到達水準）の自己点検・評価を行う。履修した科目の全てについて、学習支援計画書中の授業明細の内容を一つひとつ自分自身で確認し、理解度を自己評価する（ポートフォリオ：修学・キャリア・達成度評価などを活用）。この結果、理解不足が明らかになった内容を復習するための実行可能な計画を立てる。 2. 学習目標の明確化 本学で学ぶ意義、目的を再確認するとともに、教育課程全体における専門領域の位置付けと今後履修する専門領域推奨科目の概要をカリキュラムガイドブックおよび当該科目の学習支援計画書を通して理解し、自らの学習目標を明確にする。 3. 専門領域推奨科目の内容把握 授業や調査を通して学系・学科内の推奨科目の概要を把握するとともに、志望する専門領域およびプロジェクトデザインⅢ配属希望研究室における各科目の関連について考えるとともに、志望理由をまとめる。 4. 履修計画の作成 志望する専門領域をもとに、今後の学習・履修計画をまとめる。 5. 確率・統計の基礎 機械工学技術者にとって必要不可欠な「確率・統計」に関する基礎を学ぶとともに、正しいデータ分析や取りまとめの方法を習得する。									
【教科書および参考書・リサーチブック】 教科書：指定なし 参考書：指定なし リサーチブック：指定なし									
履修に必要な予備知識や技能									
①教員との対話の機会が多いので、十分準備して有意義な時間にする。②専門領域の内容を知ることが視野を広げるいい機会であると捉え、積極的に質問等を行って理解を深めること。③専門領域が推奨する科目群が設定されている。これらの科目を修得することはもちろんのこと、その他の科目についても自身の将来設計を考慮し計画的に履修することを薦める。④確率・統計の基礎を学ぶにあたって、基礎的な数学問題解析手法を復習しておくこと。									
No.	学科教育目標 (記号表記)	学生が達成すべき行動目標							
①	A.I	現在までの履修科目について「学生の行動目標」の項目ごとに理解度を自己点検・評価し、理解不足項目を明らかにできる。							
②	B.I,Ⅲ	これまでに修得した専門基礎科目の理解度を確認することができる。							
③	A.I	今後における自らの学習目標を明確に説明できる。							
④	A.I	専門領域について説明できるとともに、その必要性や広がりについても説明できる。							
⑤	A.I	今後の学習・履修計画を作成できる。							
⑥	B.I,Ⅲ	確率・統計の基礎を理解するとともに、データの取りまとめや分析に活用することができる。							
達成度評価									
評価方法		試験	クイズ 小テスト	レポート	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計
指標と評価割合									
総合力指標	総合評価割合	0	45	45	0	0	10	0	100
	知識を取り込む力	0	15	10	0	0	0	0	25
	思考・推論・創造する力	0	15	10	0	0	0	0	25
	コラボレーションとリーダーシップ	0	0	0	0	0	0	0	0
	発表・表現・伝達する力	0	5	10	0	0	0	0	15
	学習に取り組む姿勢・意欲	0	10	15	0	0	10	0	35

※総合力指標で示す数値内訳は、授業運営上のおおよその目安を示したものです。

<http://syllabus.fit.ac.jp/up/faces/up/km/Kms00802A.jsp>

科目名	電子回路															
英文	Electronic Circuits															
担当教員(カナ)	谷口 泰敏(タニグチ ヤストシ)															
E-mail	y-tani@fit.ac.jp					研究室	C棟8階									
学科	情報工学科					学年	2		開講学期	2010年度 前期						
必修・選択	CE必修					単位数	2		授業形式	講義						
キーワード	キーワード ダイオード、トランジスタ、増幅回路、帰還、オペレーショナルアンプ					関連リンク										
授業内容	(1) ダイオードやトランジスタなど半導体素子の構造と動作原理、基本的な使い方を学びます。 (2) トランジスタ、オペレーショナルアンプを用いた各種増幅回路の構造と機能を学びます。 (3) どう使われるかなど日常生活との関係や、発明のエピソードなどを学びます。															
学習目標A～Hを達成するために 費やされる時間の割合(%)	A	15	B		C	80	D		E		F		G	5	H	
学習目標に対するこの授業の達成目標	A:半導体、電子のエネルギー、再結合による発光など、半導体における物理の理解を深めます。 C:ダイオードやトランジスタ、オペレーショナルアンプを用いた基本回路について学びます。 G:トランジスタの発明など専門知識に関連する技術史を学びます。															
成績評価の方法	学期末試験、ノート、出席状況に基づき総合的に評価します。															
教科書・参考書	基礎電子回路(培風館)、相田、田中、中川、松原 著															
履修の前提となる科目	電気回路Ⅰ、電気回路Ⅱ、解析Ⅰ、解析学基礎															
関連科目	情報工学実験Ⅰ、Ⅱ、基礎電磁気学、量子論、微分方程式、複素関数論															
授業計画	1. 電子回路の学び方、捉え方、接地、テブナンの定理 2. 半導体、PN接合ダイオードの構造と特性、静特性と負荷線 3. 整流回路、平滑回路、コンデンサの充放電、定電圧回路 4. トランジスタの構造と原理、小信号等価回路、静特性と負荷線 5. 固定バイアス回路、自己バイアス回路、電流帰還バイアス回路 6. エミッタ接地回路、ベース接地回路、コレクタ接地回路 7. 電解効果トランジスタの構造と原理、CMOS論理回路の構成 8. 正帰還、負帰還、電力増幅回路、同調型増幅回路 9. オペレーショナルアンプ、微分積分回路、AD変換回路 10. 発振の原理、CR発振回路、LC発振回路、水晶発振回路 11. 無安定フリップフロップ、PLLの構成、CPU内部のクロック逓倍 12. 送受信機、高周波と伝送線路、イーサネット、SCSIケーブル 13. 変復調の原理とモデム、CSMA、FDMA、TDMA、CDMA、ADSL 14. コンピュータに組み込まれる計測制御回路 15. 授業内容の理解度テスト及び解説															
履修上のアドバイス	教科書にそって授業を進めるが、黒板上の解説が多いのでよくノートをとる事が大切です。															

こうした工学部（機械系学科、電気・電子系学科）に対し、経済・経営・商学系学部では、能力要素別のカリキュラム設計が行われている大学は、産業能率大学経営学部、立教大学経営学部、創価大学経済学部の3学部にとどまり、他の13大学・学部では行われていない。むしろ、こうしたことが行われていないのが、経済・経営・商学系学部では標準的であり、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）との意識の大きな差が見られる点である。

またこの中でシラバスに能力要素が各科目にまで落とし込まれているのは、産業能率大学経営学部のみである。ただし、産業能率大学の場合、シラバスは教員の著作権保護の立場から公開されていないため、本報告書には掲載できない。

(2) 振り返りとコミットメント

工学部 19 学科の平均 : 0.9 / 2.0 ポイント

経済・経営・商系 16 学部の平均 : 0.9 / 2.0 ポイント

この項目は、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と経済・経営・商学系学部とも平均 0.9 ポイントであり、両者の間での差は見られなかった。ただ、導入されていない割合としては工学部（機械系学科、電気・電子系学科）で、3 / 19 学科（約 17%）にとどまっているのに対し、経済・経営・商学系学部で 5 / 13 学科（38%）に上っており、有意な差が見られた。ただ、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）の場合は JABEE 対応による、どれだけの単位が取れたかで、教育目標がどれだけ達成したかを自動的に判定するものがほとんどであった。単位取得をベースにしているため、学生に能力要素の向上に自覚的に向き合わせる面では、弱いのではないかと思われる。

この面で、実際に PDCA が回せるように、踏み込んだ仕掛けや仕組みがあるのは、工学部では金沢工業大額電気電子工学科と岡山大学機械工学科であった。経済・経営・商学系学部では、立教大学経営学部、産業能率大学経営学部、創価大学経済学部、創価大学経営学部であった。

【V】まとめ・河合塾からの提言

以上、大学のアクティブラーニングについて質問紙調査で俯瞰すると同時に、選抜した大学・学部・学科に対しては実地評価を行い、より深く取り組みの現状を分析・紹介してきた。

以下にまとめと提言を概括的に述べる。

■工学部(機械系学科・電気・電子系学科)に関して

工学部(機械系学科、電気・電子系学科)に関しては、実験や演習をはじめ伝統的にアクティブラーニングが取り入れられている。機械工学系科では「四力学」、電気・電子系学科では「電磁気学」「電子回路」等の基本的な科目で、講義と知識の定着・確認を図る一般的アクティブラーニングを含む演習がセットで行われる等の取り組みがある程度行われていた。また初年次の導入科目で問題意識や専門分野への関心を触発するためのアクティブラーニングに始まり、2年次での基本科目での演習、3年次での実験科目、4年次での卒研という、4年間を通じてのアクティブラーニングの配置が多く調査した学科で行われていた。

授業内容の質保証という視点から見ると、学部や学科組織が教育内容・授業内容を保証するのが当然であるという考えが定着している。「人に科目が付く」のではなく「科目に人が付く」という発想であり、一般的アクティブラーニングである演習・実験はもちろん、創成授業などの高次のアクティブラーニングが導入されている学科では、そこにおいても、チームティーチングが行われている学科が多かった。しかし、不十分な点も少なくない。

第一に、講義と演習がセットになっている科目は多くの場合、「流体力学Ⅰ」「電磁気学Ⅰ」等の主要科目の基礎に限定されており、上級科目のⅡについては教員裁量であるようなケースが少なくない。また、専門科目の講義科目単体の科目も多く見受けられた。世界では、多くの取り組みが行われており、欧米豪の大学では、いわゆる知識伝達系の科目にも演習(アクティブラーニング)をセットして、知識のより強い定着を図っている。実地評価の過程では、工学部(機械系学科、電気・電子系学科)の多くの大学教員から、「まずは知識の伝達」「基礎をしっかりと教え込むことが大切」という意見を聞いた。確かに、目標としてはその通りであろう。しかし一方で、単なる講義という一方通行的な授業の型を墨守するだけでは、学生はその目的である「基礎をしっかりと覚える」ことすら困難である現実に向けるべきではないだろうか。

第二に、創成授業等の高次のアクティブラーニングは、実地評価対象学科でもそれほど多いとは言えない。高次のアクティブラーニングは、卒業研究を除くと、3年次にエンジニアリング・デザイン科目として置かれているケースが多くあった。まず知識を与え、それから知識を活用する、という考えに基づくものであると思われる。しかし、他方で高次のアクティブラーニングを行うことで、そこで不足となった専門知識への渴望やモチベーションが生まれるという発想に立って行われているケースもある。その意味では、1学年に1回だけではなく、それぞれの専門知識のレベルに応じて、1年次から3年次まで系統的に高次のアクティブラーニングを配置していくことが求められているのではないだろうか。

第三に、能力要素別カリキュラムと振り返りでは、JABEEに準拠してある程度までは進んでいるが、別の面から見るとJABEEの範囲を超えた取り組みはまだ少ない。学生に自らの能力を自覚させ、目的意識的に能力形成に向き合わせる取り組みがもっと重要視されてもしかるべきではないだろうか。たとえば、エンジニアリング教育には、チームワークへの貢献やリーダーシップなどの要素を含むものと考えられている。単位が取得できれば能力が形成されるという考え方では、創成授業を受け単位を取得すれば、学生は自動的にチームワーク能力が高まるということになる。しかし実際には、その授業の中でどのように個々の学生が関わり、それをとらえ返し、自覚を深めたのか、こそが問題となるはずである。その点で、いくつかの学科では創成授業の中で、チームへの関わりをとらえ返させるレポートや振り返りシートを導入していたが、こうした取り組みはもっと多くの学科で取り入れられるべきであろう。

付記すると、この点については興味深い調査結果も得ることができた。それは、金沢工業大学(全学)

と東京大学（機械情報工学科）の違いである。前者は学生の振り返りや目標設定に大学を挙げて注力しているのに対して、東京大学の場合はこの面では全くと言っていいほど、具体的な取り組みは行われていない。

しかし、巷間言われるように東京大学は「研究を通じた教育」というフンボルト理念の体現者として研究にシフトし、学生への教育それ自体には注力をしていないかと言えば、決してそうではないのである。実地評価の 3 つの視点のうち、《評価の視点：Ⅲ》学生の自律・自立化を除く、すべての項目で金沢工大と東京大学は最高の評価ポイントを示している。学生の自律・自立化の取り組みのみが、見事と言うほどに異なっているのである。これは、入学してくる学生の違いによるものであることは容易に想像がつく。東京大学の場合には超難関の入試を突破してきたという点で、モチベーションも高いと言われているからである。しかし、それに加えて東京大学の場合には、卒業必要単位数が圧倒的に多い。ほとんどの大学で卒業必要単位が最低限の 124 単位から 130 単位台に留まるのに対し、東京大学工学部では平均で 160 単位にも達している。しかもレイトスペシャリゼーションに基づき、2 年次終了時には成績に基づく進路振り分けが行われ、多くの学生は希望学部に進むためにモチベーションを維持せざるを得ない。さらに、先に見た「アクティブラーニングの設計」にもあるように、3 年次と 4 年次では毎週 4 日間も午後全体を使った「機械工学総合演習第二」や「知能ソフトウェア演習」「ロボットシステム演習」「メカトロニクス設計演習」などが置かれている。つまり、こうした圧倒的なボリュームと質をクリアするために、あるいは少なくともそれをクリアしようとする学生は、自律的に勉学に取り組まざるを得ない。こうしたカリキュラムの徹底があつてこそ、学生の自律・自立化を支援する振り返りや目標設定などの取り組みは不要となっているように思われる。その意味では、入試が難関であることのみをもって、学生の自律・自立化の取り組みが不要であるわけではない点に注意を促しておきたい。

つまり、学生の自律・自立化で問われていることは、現実の学生に見合った対応が必要だということであり、その点では金沢工大も東京大学も、見合った対応が行われていると思われるということである。

■経済・経営・商学系学部に関して

経済・経営・商学系学部では、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）と比較すると大きな差が存在する。

第一に、アクティブラーニングの 4 年間を通じた配置を見ると、2 年次に配置されていない学部が多くあった。これは、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では 2 年次に四力学や「電磁気学」「電子回路」などの基本科目が演習を含んで行われているのに対し、経済・経営・商学系学部では講義科目のみ置かれるアクティブラーニングの空白学年となりやすいことを示している。1 年次で初年次ゼミを導入してアクティブラーニングを行う学部は増えてきており、また、伝統的に 3 年次から専門ゼミが始まる学部が多いのだが、せっかく初年次で始めたアクティブラーニングを 2 年次で中断してしまわないように、カリキュラム設計を考えるべきではないだろうか。

第二に、経済・経営・商学系学部では講義のみの科目を「当たり前」のこととして置かれているが、その教育効果を検証すべきである。講義科目で事足りりとするのは、いわば「教える側」の都合が優先されているわけであり、「学習者中心」で教育に取り組もうとするのであれば、こうした旧来の「常識」を突破することが求められているのではないだろうか。

第三に、高次のアクティブラーニングについてである。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）への提言にも記したように、もっと 1 年次から 3 年次まで途切れなく配置すべきと言うことはできるが、経済・経営・商学系学部ではそれ以前の課題が残っていると思われる。つまり、積極的に PBL や創成授業などの高次のアクティブラーニングを取り入れている学部も現れてきているが、他方で、その高次のアクティブラーニングにおいて専門知識を活用する意識が弱いと思われる事例も散見されるのである。

高次のアクティブラーニングを行い、何かイベント等に取り組むと学生は活性化する。モチベーション

も高まる。特に経済・経営・商学系学部の場合は、専門知識を活用しなくても、それなりの関わりが学生にできてしまうことが多い。しかし、それだけに終始すれば、「何を学んだか」「何を学ぶべきか」を確認しないまま終わることにもなりかねない。そうさせないようにする意識性が、高次のアクティブラーニングの設計者には求められているのである。どこかで、専門知識を否が応にも使わざるを得ない場面を作ることが大切ではないだろうか。

第四に、授業の質保証の面である。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）では、基本的に学科としてのチームティーチングが行われていたが、経済・経営・商学系学部では、その面では未だ「科目が人に付く」という学部が多く見られた。旧来から在る講義系の科目では特にその傾向が強い。他方で、新しい領域であるアクティブラーニングに関しては、科目の内容を学科で決めていくところも多く見られた。しかし、いずれにせよ、高度な専門科目やゼミでない限り、学部として何を教え何を身に付けさせるべきかに責任を持った体制を構築すべきではないだろうか。

第五に、教育目標・獲得させるべき能力とカリキュラムの関係を明確にすべきである。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）においては、JABEE 対応ということもあって、教育目標・獲得させるべき能力とカリキュラムの関係が一定程度、明確である。しかし、経済・経営・商学系学部においては、そうしたカリキュラム編成上の問題意識が見られた学部は極めて少ない。こうした点も早急に改革していく必要があると当プロジェクトは考える。

■工学部(機械系学科、電気・電子系学科)、経済・経営・商学系学部の両方に関して

最後に、工学部（機械系学科、電気・電子系学科）、経済・経営・商学系学部にまたがる問題として、レポートの返却にも触れておきたい。

このレポート返却および教員のコメントについては、2009 年度に発行された「全国大学学生調査 追跡調査 報告書」（東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター発行）に興味深い数値が載っている。この調査は第一次が国公私大生 48,233 名を対象に 2007 年に実施され、追跡調査はその内の 14,083 名を対象に 2009 年に実施されたものであるが、そこにおいてレポートにコメント付されて返却された学生の方が、その後のモチベーションに有意な差があるという調査結果である。当然、学習者を中心に据えるならば、学生が自ら行動した結果であるレポートに教員が具体的に対応することは不可欠のはずである。本調査でも、レポート返却について質問紙および実地評価でも取り上げた。工学部（機械系学科、電気・電子系学科）の場合、いわゆる実験科目ではレポートの受理までのプロセスが教員との応酬になっており、その意味では大多数の学科の実験科目ではコメントが行われえいるということが明らかとなった。

では、それ以外の科目においてどうか。金沢工大をはじめ多くの大学では、初年次ゼミではコメントを付して返却するという対応が見られた。また、東京大学工学部機械情報工学科や創価大学経済学部では、明文化されたルールはないが、「大体においてコメントを付して返却されている」という回答があった。唯一、京都工芸繊維大学工芸科学部機械システム工学課程では、すべての科目でレポートの返却が義務付けられていた。レポートのコメント付き返却は教員の負担も大きいことは自明であるが、その効果や意義を考えればレポート提出の回数を減らしてでも、この双方向性の確保に取り組むべきではないだろうか。

最後になるが、本調査は大学における 4 年間のアクティブラーニングに「形態的に」フォーカスしたものである。しかし、これはあくまでも「学習者中心の教育」を調査しようとした目的意識の結果として、「そうなった」ものであることを述べておきたい。その意味では、アクティブラーニングという形態がア priori に重要なのではなく、「学習者中心の教育」こそが重要なのである。それを追求していくと、「必然的」にアクティブラーニングという授業形態の調査にならざるを得なかった、という点を申し添えておきたい。

アンケート（質問紙）

調査票

－ 理工系バージョン －

ゼミ・演習などの教育システム調査

－ 理工系バージョン －

【はじめに】

1. 本アンケートで用いる用語

大学における授業の分類	文部科学省の規定では、大学の授業は「講義」「演習」「実験・実習」に分かれます。																									
ゼミ	「演習」のうち双方向、少人数で行われるものを指します。																									
アクティブラーニング	PBL (project/problem based learning)、実験・実習、フィールドワークなどの参加型・能動型学習を指します。																									
アクティブ科目	「ゼミ」「演習」「実験・実習」以外で、「講義」に分類されるものでありながら、アクティブラーニングが組み込まれた科目を指します。																									
プログラムゼミ	共通テキストや共通プログラムによって複数クラスで、複数セメスターにまたがって展開される設計のゼミ・演習・アクティブ科目と定義します。 [プログラムゼミの概念図]																									
	<パターン①>		<パターン②>																							
	<table><tr><th colspan="2">セメスター</th><th>前期</th><th>後期</th></tr><tr><td rowspan="2">プログラムゼミA</td><td>クラスA-1 (25人)</td><td>→</td><td>→</td></tr><tr><td>クラスA-2 (25人)</td><td>→</td><td>→</td></tr></table>		セメスター		前期	後期	プログラムゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→	クラスA-2 (25人)	→	→	<table><tr><th>セメスター</th><th>前 期</th><th colspan="2">後 期</th></tr><tr><td rowspan="2">プログラムゼミB</td><td>クラスBI-1 (25人)</td><td>→</td><td rowspan="2">クラスBII-1 (25人)</td><td rowspan="2">→</td></tr><tr><td>クラスBI-2 (25人)</td><td>→</td></tr></table>		セメスター	前 期	後 期		プログラムゼミB	クラスBI-1 (25人)	→	クラスBII-1 (25人)	→	クラスBI-2 (25人)	→
	セメスター		前期	後期																						
	プログラムゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→																						
クラスA-2 (25人)		→	→																							
セメスター	前 期	後 期																								
プログラムゼミB	クラスBI-1 (25人)	→	クラスBII-1 (25人)	→																						
	クラスBI-2 (25人)	→																								
複数セメスターにわたって、複数のクラスで、共通テキストに基づいて進行するプログラムゼミのパターン		複数セメスターにわたって共通テキストに基づいて進行されるゼミであるが、セメスターが進むごとにクラス数が減り、履修者が絞られていくプログラムゼミのパターン																								
上図の<パターン②>に該当するものとしては、立教大学経営学部のビジネス・リーダーシップ・プログラム（BLP）を例示することができます。 立教大学 BLP：一年次後期から始まって 5 学期・2 年半のあいだ行われる、学科全員履修の少人数クラス（25-35 名程度）で、経営学科のコアとなる科目。																										
BL4 総合ビジネス問題解決 起業プロジェクト BL2 ビジネス問題 解決プロジェクト BL0 問題解決を通じて、 リーダーシップの必要性 を体感する BL3 A リーダーシップの理論 による振り返り B リーダーシップの ためのコミュニケーション C 批判的思考力 BL1 ディベートを通じ、 論理思考力を身につける プロジェクト スキル																										
注1) 以下に示す科目はプログラムゼミには含みません。 ・ 初年次ゼミ、教養科目の語学科目・情報科目・体育科目 ・ キャリアセンター等が提供するキャリア教育 ・ 「履修モデル」や制度上の「専攻」「コース」																										

2. 本調査紙全体を通じて除外しているもの

- ① 教養科目に分類される「語学科目」、「体育科目」、「情報系科目」については除外します。
- ② 「演習」であっても、ドリル等を用いた解法・技法など、個人のトレーニングのみを目的としたもの。

【本アンケートの構成と意図】

- ① 本アンケートは、学部・学科のカリキュラムや教育の「設計」についてお訊きするものです。個々の教員の裁量や努力で取り組まれていることについては【C-4】でお訊きしますが、それ以外の質問では、学部・学科として設計されていることについてお答えください。
- ② 本アンケートは、以下の項目から構成されています。

大区分	中区分	設問内容
【A】の質問群	【A-1】	卒業論文の設定状況
	【A-2】	大学院進学率と学会発表論文数
【B】の質問群	【B-1】	ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の設計の考え方・特長
	【B-2】	ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の配置と区分
	【B-3】	初年次ゼミの設定状況とアクティブ性
	【B-4】	専門ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の1～4年次での設定状況とアクティブ性
【C】の質問群	【C-1】	複数セメスターで連続しているプログラムゼミの設定状況
	【C-2】	講義とゼミ・演習・アクティブ科目が有機的に組み合わされている科目
	【C-3】	ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の外部との連携状況
	【C-4】	個別の教員の成果を上げている取り組みについて
	【C-5】	本調査についてのご意見

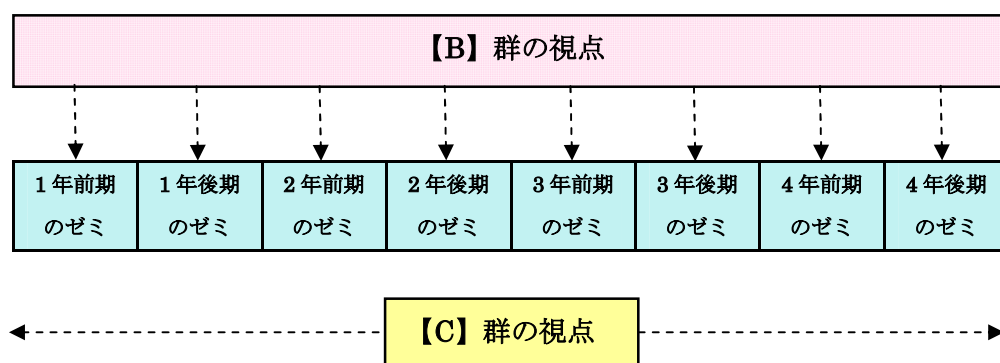
- ③ 質問の意図については、以下の点をご確認ください。

本質問紙は大きく分けて【A】の質問群、【B】の質問群、【C】の質問群で構成されています。

【A】群は、卒業論文や学会発表など、教育の成果に関する質問群です。

【B】の質問群は、「各学年」の「一時点」において、学生はゼミ・演習・実験科目ではどのような「やり方」で学んでいるかという視点から質問しています。

これに対し【C】群では4年間の学士課程教育を通して、ゼミ・演習・実験がどのように行われているか、という視点から質問しています。



以下、質問にお答え下さい。

選択肢の場合は、該当すると思われるものを1つ選び、[]の中に○印をつけて下さい。

「複数回答可」の場合は、それに従って下さい。

記述式の場合は、指定の回答欄にご記入下さい。

【A】の質問群

【A-1】卒業論文の設定状況

1. 必須の有無

[]全員必須とされている

→[]最低限の量の規定がある→その量は[]以上]

[]量の規定はない

[]必須とされていない

→学科1 学年の学生数を母数として、卒業論文を執筆する学生の割合は

☐ 30%未滿 ☒ 30%以上 70%未滿 ☐ 70%以上

→必須とされていない理由 ※自由記述でお願いします

2. 審査体制について

[]複数教員による審査が行われる

[]担当教員のための審査が行われる

3. 審査（評価）基準について

明文化された審査（評価）基準のチェックシートが ☐ がある ☐ ない

4. 発表会の有無（複数回答可）

[]卒論発表会が行われている

→[]全員の口頭発表がある

→[]卒論発表会での発表が成績に反映される

[]卒論発表会での発表は成績に反映されない

[] 全員参加のポスターセッションがある

[] 優秀論文の発表会がある

[]卒論発表会は行われていない

【A-2】大学院進学率と学会発表について

1. 大学院修士（博士課程前期 ※他大学の大学院を含む）への進学率はどの程度でしょうか

☐ 30%未満 ☐ 30%以上～50%未満 ☐ 50%以上～70%未満 ☐ 70%以上

2. 2009 年度に修士修了者の学会発表論文数合計 (最も多数の学生が進学する研究科についてご回答ください)

[]本/[]人（2009年度に修士を修了した人数） 研究科名[]

※ 複数の人数で共同して論文執筆を行った場合は、その人数分の本数としてカウントしてください。

例：2人で論文執筆した場合は2本。

3. 2009 年度に卒業した学科学生の学会発表論文数合計

[]本/[]人（2009年度に学部を卒業した人数）

※ 複数の人数で共同して論文執筆を行った場合は、その人数分の本数としてカウントしてください。

例：2人で論文執筆した場合は2本。

【B】の質問群

【B-1】貴学科のゼミ・演習・実験・アクティブ科目に関して、どのようにカリキュラム設計を行っていますか。特に他大学・学部・学科と比較してより優れている特色を中心に、自由記述でご回答ください。

【B-2】ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の配置と区分について

セメスター		1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	3 年前期	3 年後期	4 年前期	4 年後期
ゼミ・演習・実験	ゼミ・演習・実験の必修の有無 （[○]で回答） と1人の学生が履修しなければならない必修科目数（数字で回答）	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択
	上記のゼミ・演習・実験の区分 （[○]で回答、複数回答可）	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 （卒論演習を含む） []教養科目 []その他	[]専門科目 （卒論演習を含む） []教養科目 []その他
アクティブ科目	必修または選択 （[○]で回答） と1人の学生が履修しなければならない必修アクティブ科目の科目数（数字で回答）	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択

- ※1 「必修の科目数」は、一人の学生が何科目必修とされているかをご回答ください。
- ※2 通年開講のゼミの場合、前期と後期に[○]を記入してください。
- ※3 「アクティブ科目」の回答欄には、「ゼミ・演習・実験」には該当しない科目についてのみご記入ください。
- ※4 この表は、一般的な学年やセメスターを基準に作成しています。この分類に合致しない学期制度等を採用されている場合は、表を加工された上でお答えください。

【B-3】初年次ゼミについて

1. 1年生前期に配当されている初年次ゼミ（アクティブ科目を含む）の設定状況とアクティブ性についてお訊きします。

※1 初年次ゼミとは、初年次に配当され①スタディスキルや、②大学での能動的な学びへの態度転換を目的に行われるゼミを指します（1年次配当の専門ゼミについては【B-4】でお答え下さい）。

※2 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

項 目	必須の有無	追加質問
学部・学科提供の初年次ゼミの設定状況（必修か、選択か） 設定している場合は以下①～⑦にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（⑧へ）	☐ 学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学生の 30%未満が履修（カバー率小）
① グループ学習	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
② ディベート	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
③ フィールドワーク	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
④ プレゼンテーション	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑤ レポート提出	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ レポートの返却必須 → ☐ 教員のコメント必須 ☐ 教員のコメントは任意 ☐ 教員のコメントなし ☐ レポート返却は教員裁量 ☐ レポート返却しない
⑥ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど）	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑦ 授業時間外学習	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） （基本的に授業は調べたりしたことの発表の場合） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
⑧ 学部・学科以外(全学組織等)が提供している初年次ゼミで、学科の学生が履修できる科目の有無	☐ 有 → ☐ 学科全員が必修 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 無	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小）

2. 1年生後期に配当されている初年次ゼミ（アクティブ科目を含む）の設定状況とアクティブ性についてお訊きします。

※1 初年次ゼミとは、初年次に配当され①スタディスキルや、②大学での能動的な学びへの態度転換を目的に行われるゼミを指します（1年次配当の専門ゼミについては【B-4】でお答え下さい）。

※2 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

項 目	必須の有無	追加質問
学部・学科提供の初年次ゼミの設定状況（必修か、選択か） 設定している場合は以下①～⑧にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（⑨へ）	☐ 学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学生の 30%未満が履修（カバー率小）
① グループ学習	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
② ディベート	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
③ フィールドワーク	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
④ プレゼンテーション	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑤ レポート提出	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ レポートの返却必須 → ☐ 教員のコメント必須 ☐ 教員のコメントは任意 ☐ 教員のコメントなし ☐ レポート返却は教員裁量 ☐ レポート返却しない
⑥ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど）	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑦ 授業時間外学習	☐ 学科の全ゼミで必須 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない	☐ 基本的に毎回（頻度大） （基本的に授業は調べたりしたことの発表の場） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
⑧ ゼミの連続性	前の学期に配当されているゼミの履修を ☐ 前提としている ⇒（右の追加質問へ） ☐ 前提としていない	前のゼミと連続していること ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同じ教員） ☐ 人間関係（同じ学生） ※複数回答可
⑨ 学部以外（全学組織等）が提供している初年次ゼミで、学科の学生が履修できる科目の有無	☐ 有 → ☐ 学科全員が必修 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 無	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小）

【B-4】専門ゼミについて

1. 1年次に配当されている専門ゼミ、演習、実験、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（8 頁に移ってください）	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※ 選択ゼミや履修する学生の合計が、1 学年の学科学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・実験・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ ディベート ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど） ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 1年後期に配当されている場合、その科目は前の期のゼミ・演習・実験・アクティブ科目の履修を前提としていますか。	☐ 履修を前提としている → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同じ教員） ☐ 人間関係（同じ学生） ※複数回答可 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 履修を前提としていない	その科目名は何ですか。 前の期の科目名は何ですか。

2. 2年次に担当されている専門ゼミ、演習、実験、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（9 頁に移ってください）	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※ 選択ゼミや履修する学生の合計が、1 学年の学科学生数に占める割合で回答してください。
	[狙い・特長]	
① この学年次に専門ゼミ・演習・実験・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）		
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ ディベート ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど） ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・実験・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同じ教員） ☐ 人間関係（同じ学生） ※複数回答可 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 無	その科目名は何ですか。 前の期の科目名は何ですか。

3. 3年次に配当されている専門ゼミ、演習、実験、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（10 頁に移ってください）	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※ 選択ゼミや履修する学生の合計が、1 学年の学科学生数に占める割合で回答してください。
	[狙い・特長]	
① この学年次に専門ゼミ・演習・実験・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）		
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ ディベート ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど） ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・実験・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同級生） ☐ 人間関係（同教員） ※複数回答可 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 無	その科目名は何ですか。 前の期の科目名は何ですか。

4. 4年次に配当されている専門ゼミ、演習、卒論ゼミ、実験、アクティブ科目についてお訊きします。

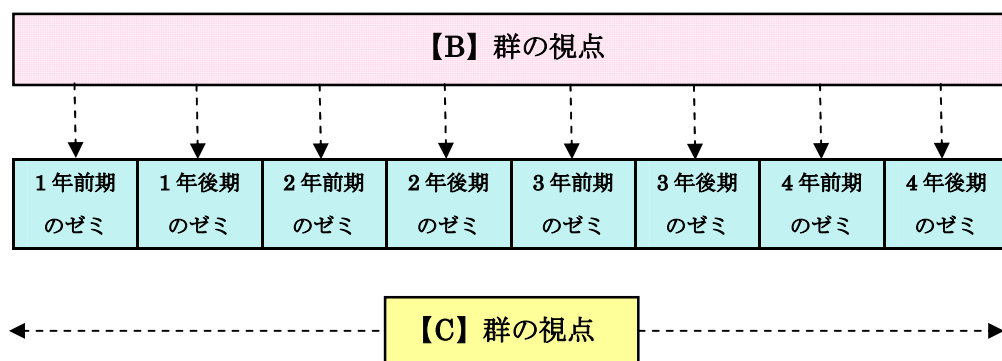
※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学科全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 設定していない ⇒（11 頁に移ってください）	☐ 学科学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学科学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学科学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※ 選択ゼミや履修する学生の合計が、1 学年の学科学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・実験・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ ディベート ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート （学習の記録・ポートフォリオなど） ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・実験・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学科の学生のうちの何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・実験・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同じ教員） ☐ 人間関係（同じ学生） ※複数回答可 ⇒（右の追加質問へ） ☐ 無	その科目名は何ですか。 前の期の科目名は何ですか。

【C】の質問群

ここからは【C】の質問群に移ります。ここでは4年間の学士課程教育を通して、ゼミ・演習・実験・アクティブ科目がどのように行われているか、という視点から質問します。



【C-1】複数セメスターで連続しているプログラムゼミの設定状況

共通テキストおよび共通プログラムによって複数クラスで、複数セメスターにまたがって展開されるプログラムゼミについてお答えください。

- ※1 初年次ゼミと教養科目の語学科目、情報科目、体育科目は除きます。
- ※2 キャリアセンター等が提供するキャリア教育については除きます。
- ※3 「履修モデル」や制度上の「専攻」「コース」は除きます。

[プログラムゼミの概念図]

<パターン①>

セメスター		前期	後期
プログラム ゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→
	クラスA-2 (25人)	→	→

複数セメスターにわたって、複数のクラスで、共通テキストに基づいて進行するプログラムゼミのパターン

<パターン②>

セメスター	前 期		後 期	
プログラム ゼミB	クラスBI-1 (25人)	→	クラスBII-1 (25人)	→
	クラスBI-2 (25人)	→		

複数セメスターにわたって共通テキストに基づいて進行されるゼミであるが、セメスターが進むごとにクラス数が減り、履修者が絞られていくプログラムゼミのパターン

1. 設定の有無

[] 設定されている

→ [] 必修 [] 選択 ※複数選択可 ⇒ (その内容を12頁の表に記入して下さい)

[] 設定されていない ⇒ (【C-2】へ)

2. プログラムゼミの内容

<回答欄①>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の意図			
このプログラムにおいて獲得すべき能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たり的人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

<回答欄②>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の意図			
このプログラムにおいて獲得すべき能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たり的人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

<回答欄③>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の意図			
このプログラムにおいて獲得すべき能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たり的人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【C-2】 講義科目とゼミ・演習・実験・アクティブ科目が有機的に組み合わされている科目の設定状況

講義科目は知識の集積を目的とし、ゼミ・演習・アクティブ科目は知識の定着や活用知・実践知への転換を目的として、日本では通常は別々の科目として行われています。この講義科目とゼミ・演習・アクティブ科目を有機的に結び付ける取り組みについてお聞きます。

同じ期に開講される同一教員による 2 つの科目で、1 つの科目では講義が、もう 1 つの科目ではゼミ・演習・アクティブ科目、またはアクティブラーニングが行われ、履修する場合は必ず両科目をセットで履修することが求められる科目が設定されているのでしょうか。

＜講義と演習が組み合わされた科目設定の例＞

時限	月曜日	火曜日
1 時限	D 概論 (河合教授)	
2 時限		E 演習 (河合教授)
注) D 概論と E 演習は必ず同時履修すること。		

※ ただし、以下はゼミ，演習，アクティブ科目およびアクティブラーニングには含めません。

・インターンシップ ・ドリル等を用いた解法・技法など、個人のトレーニングのみを目的としたもの

1. 設定の有無

[] 設定されている

[] 設定されていない ⇒ (【C-3】へ)

2. 組み合わせ履修科目の内容

	組み合わせ科目①	組み合わせ科目②	組み合わせ科目③
科目名			
必修／選択区分	[] 必修 [] 選択	[] 必修 [] 選択	[] 必修 [] 選択
30 人以下			
履修人数			
31 人～50 人			
51 人～100 人			
101 人～200 人			
201 人以上			
配当学年・セメスター	[] 年 [] 期	[] 年 [] 期	[] 年 [] 期
取り組むテーマ (内容)			
講義と討議・ゼミ(演習)の比率	:	:	:
※合計 10 になるように			

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【C-3】ゼミ・演習・実験・アクティブ科目の外部への開放性および、外部との連携状況

ゼミや演習などが、1人の教員のもとに閉じられていて外部から内容が検証できなくなっていたり、社会や外部との接点を設けないことによる弊害が指摘されることがあります。外部への開放性や連携についてお伺いします。

※ 個々の教員の裁量で行われていることなく、学部・学科のカリキュラム設計として取り組まれていることについてご回答ください。

1. 他のゼミとの共同ゼミ・合同ゼミについて

☐ 行っている ☐ 行っていない

→ ☐ 他大学のゼミとの共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 他学部との共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 他学科との共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 学科内の共同ゼミ・合同ゼミ

2. 運営の問題として解決すべきテーマを外部（企業、自治体、NPO、学会等）と連携することで得て、成果をプレゼンテーションしている科目

1) 有無について

☐ ある ☐ ない ⇒ (【C-4】へ)

2) 「ある」場合には、その科目について以下の表にご記入下さい。

履修者数を数字で回答、テーマを得ている先およびプレゼンテーション先を「○」で回答して下さい。

科目名	履修者数 (人)	どんな組織との連携でテーマを得て					成果をどこにプレゼンテーションしているか				
		企 業	自治体	NPO	学 会	その他	企 業	自治体	NPO	学 会	その他

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

3. その成果をプレゼンテーション大会や学会発表等に参加する科目

「2.」で回答された科目のうち、学内でのプレゼンテーション大会、研究発表会等への発表が必須化されている科目

※ 卒論発表会等の卒業論文に関するものは除きます。

1) 有無について

☐ ある ☐ ない ⇒ (【C-4】へ)

2)「ある」場合には、その科目について以下の表にご記入下さい。

科目名	履修者数 (人)	参加発表会名	外部評価委員 の有無 （「○」で回答）	発表会後の学外の大会等への参加の有無 （「○」で回答）

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【C-4】個別教員による進んだ取り組み

本質問紙では、学部・学科としての設計をお訊きしてきましたが、ここでは個々の教員の裁量による取り組みとして、特に成果を挙げている特色あるゼミ・演習・実験・アクティブ科目がありましたらお答えください。

科目名	配当学年	担当教員名	特徴（自由記述）

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【C-5】本調査についてのご意見

当調査についてのご意見などがございましたらご記入ください。今後の調査に反映させていただきます。また、報告書等へも掲載させていただく場合がございます。

■2010年度の貴学科についてお答えください

大学名_____ 学部名_____ 学科名_____

学部の1年生の定員_____人 学部設置年度（西暦_____年度）

学科の1年生の定員_____人 学科設置年度（西暦_____年度）

■ご回答くださった方についてお答えください

ご回答者	所属 役職		(フリガナ) お名前	()
ご連絡先	TEL		e-mail	
	FAX			
	住所	〒		

※ ご記入いただいた個人情報は、ご回答内容に関する問い合わせ、及び、調査報告書の発送、及び、今回調査報告に関する案内のためのみに使用いたします。

ご協力ありがとうございました。

アンケート（質問紙）

調査票

－ 文系学部バージョン －

ゼミ・演習などの教育システム調査

－ 文系学部バージョン －

【はじめに】

1. 本アンケートで用いる用語

大学における授業の分類	文部科学省の規定では、大学の授業は「講義」「演習」「実験・実習」に分かれます。											
ゼミ	「演習」のうち双方向、少人数で行われるものを指します。											
アクティブラーニング	PBL（project/problem based learning）、実験・実習、フィールドワークなどの参加型・能動型学習を指します。											
アクティブ科目	「ゼミ」「演習」「実験・実習」以外で、「講義」に分類されるものでありながら、アクティブラーニングが組み込まれた科目を指します。											
プログラムゼミ	共通テキストや共通プログラムによって複数クラスで、複数セメスターにまたがって展開される設計のゼミ・演習・アクティブ科目と定義します。 [プログラムゼミの概念図] ＜パターン①＞ <table><tr><th colspan="2">セメスター</th><th>前期</th><th>後期</th></tr><tr><td rowspan="2">プログラム ゼミA</td><td>クラスA-1 (25人)</td><td>→</td><td>→</td></tr><tr><td>クラスA-2 (25人)</td><td>→</td><td>→</td></tr></table> 複数セメスターにわたって、複数のクラスで、共通テキストに基づいて進行するプログラムゼミのパターン 	セメスター		前期	後期	プログラム ゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→	クラスA-2 (25人)	→	→
	セメスター		前期	後期								
	プログラム ゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→								
		クラスA-2 (25人)	→	→								

2. 本調査紙全体を通じて除外しているもの

- ① 教養科目に分類される「語学科目」、「体育科目」、「情報系科目」については除外します。
- ② 「演習」であっても、ドリル等を用いた解法・技法など、個人のトレーニングのみを目的としたもの。

【本アンケートの構成と意図】

- ① 本アンケートは、学部・学科のカリキュラムや教育の「設計」についてお訊きするものです。個々の教員の裁量や努力で取り組まれていることについては【C-4】でお訊きしますが、それ以外の質問では、学部・学科として設計されていることについてお答えください。
- ② 本アンケートは、以下の項目から構成されています。

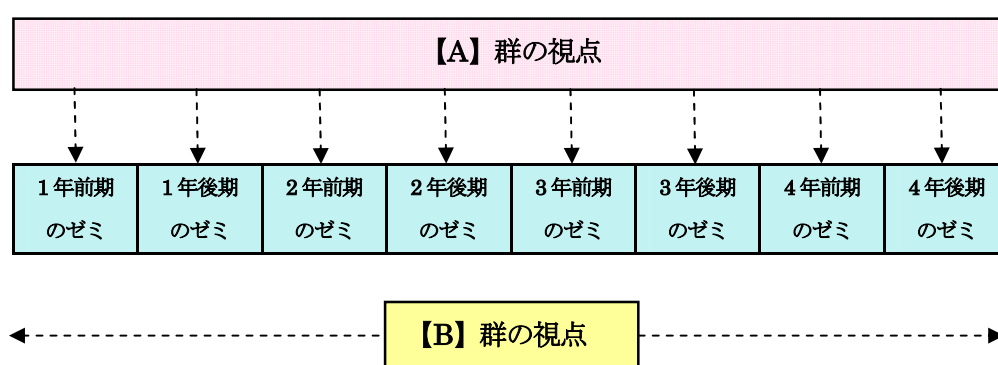
大区分	中区分	設問内容
【A】の 質問群	【A-1】	ゼミ・演習・アクティブ科目の設計の考え方・特長
	【A-2】	ゼミ・演習・アクティブ科目の配置と区分
	【A-3】	初年次ゼミの設定状況とアクティブ性
	【A-4】	専門ゼミ・演習・アクティブ科目の1年次～4年次での設定状況とアクティブ性
【B】の 質問群	【B-1】	複数セメスターで連続しているプログラムゼミの設定状況とアクティブ性
	【B-2】	講義とゼミ・演習・アクティブ科目が有機的に組み合わせられている科目
	【B-3】	ゼミ・演習・アクティブ科目の外部との連携状況
	【B-4】	卒業論文の設定状況
	【B-5】	個別の教員の成果を上げている取り組みについて
	【B-6】	本調査についてのご意見

- ③ 質問の意図については、以下の点をご確認ください。

本質問紙は大きく分けて【A】の質問群と【B】の質問群で構成されています。

【A】群は、いわばその「学年」の「一時点」において、ゼミ・演習・アクティブ科目でどのような「やり方」で学んでいるかという視点から質問しています。

これに対し【B】群では4年間の学士課程教育を通して、ゼミ・演習・アクティブ科目がどのように行われているか、という視点から質問しています。また【B】群には卒業論文や学会発表等に関する質問も含まれています。



以下、質問にお答え下さい。

選択肢の場合は、該当すると思われるものを1つ選び、[]の中に○印をつけて下さい。

「複数回答可」の場合は、それに従って下さい。

記述式の場合は、指定の回答欄にご記入下さい。

【A】の質問群

【A-1】貴学部のゼミ・演習・アクティブ科目に関して、どのようにカリキュラム設計を行われていますか。特に他大学・学部・学科と比較してより優れている特色を中心に、自由記述でご回答ください。

【A-2】ゼミ・演習・アクティブ科目の配置と区分について

セメスター		1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	3 年前期	3 年後期	4 年前期	4 年後期
ゼミ・演習	ゼミ・演習の必修の有無（[○]で回答）と1人の学生が履修しなければならない必修科目数（数字で回答）	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択
	上記のゼミ・演習の区分（[○]で回答、複数回答可）	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 []教養科目 []その他	[]専門科目 (卒論演習を含む) []教養科目 []その他	[]専門科目 (卒論演習を含む) []教養科目 []その他
アクティブ科目	必修または選択（[○]で回答）と1人の学生が履修しなければならない必修アクティブ科目の科目数（数字で回答）	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択	[]必修 →[]科目 []選択

- ※1 「必修の科目数」は、一人の学生が何科目必修とされているかをご回答ください。
- ※2 通年開講のゼミの場合、前期と後期に[○]を記入してください。
- ※3 「アクティブ科目」の回答欄には、「ゼミ・演習」には該当しない科目についてのみご記入ください。
- ※4 この表は、一般的な学年やセメスターを基準に作成しています。この分類に合致しない学期制度等を採用されている場合は、表を加工された上でお答えください。

【A-3】初年次ゼミについて

1. 1年生前期に配当されている初年次ゼミ（アクティブ科目を含む）の設定状況とアクティブ性についてお訊きします。

※1 初年次ゼミとは、初年次に配当され①スタディスキルや、②大学での能動的な学びへの態度転換を目的に行われるゼミを指します（1年次配当の専門ゼミについては【A-4】でお答え下さい）。

※2 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

項 目	必須の有無	追加質問
学部提供の初年次ゼミの設定状況（必修か、選択か） 設定している場合は以下①～⑦にお答えください。	☐ 学部全員必修科目 ☐ 選択科目 ☐ 学科により必修科目 ☐ 設定していない ⇒ (⑧に移って下さい) } (右の追加質問へ)	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小）
① グループ学習	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
② ディベート	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
③ フィールドワーク	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
④ プレゼンテーション	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑤ レポート提出	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ レポートの返却必須 → ☐ 教員のコメント必須 ☐ 教員のコメントは任意 ☐ 教員のコメントなし ☐ レポート返却は教員裁量 ☐ レポート返却しない
⑥ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど)	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑦ 授業時間外学習	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） (基本的に授業は調べたりしたこと発表の場合) ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
⑧ 学部以外（全学組織等）が提供している初年次ゼミで、学部の学生が履修できる科目の有無	☐ 有 → ☐ 学部全員が必修 ☐ 選択科目 ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 無	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小）

2. 1年生後期に配当されている初年次ゼミ（アクティブ科目を含む）の設定状況とアクティブ性についてお訊きします。

※1 初年次ゼミとは、初年次に配当され①スタディスキルや、②大学での能動的な学びへの態度転換を目的に行われるゼミを指します（1年次配当の専門ゼミについては【A-4】でお答え下さい）。

※2 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

項 目	必須の有無	追加質問
学部提供の初年次ゼミの設定状況（必修か、選択か） 設定している場合は以下①～⑧にお答えください。	☐ 学部全員必修科目 ☐ 選択科目 ☐ 学科により必修科目 ☐ 設定していない ⇒ (⑨～) } (右の追加質問へ)	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小）
① グループ学習	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
② ディベート	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
③ フィールドワーク	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
④ プレゼンテーション	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑤ レポート提出	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ レポートの返却必須 → ☐ 教員のコメント必須 ☐ 教員のコメントは任意 ☐ 教員のコメントなし ☐ レポート返却は教員裁量 ☐ レポート返却しない
⑥ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど)	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小） ☐ 最後の発表時のみ
⑦ 授業時間外学習	☐ 学部の全ゼミで必須 ☐ 学科により全ゼミで必須 ☐ 教員の裁量 ☐ 教育課題としているが把握していない ☐ 教育課題としていない } (右の追加質問へ)	☐ 基本的に毎回（頻度大） (基本的に授業は調べたりしたことの発表の場合) ☐ 2～3 回に 1 回程度（頻度中） ☐ 時々（頻度小）
⑧ ゼミの連続性	前の学期に配当されているゼミの履修を ☐ 前提としている ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 前提としていない	前のゼミと連続していること ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（同じ教員） ☐ 人間関係（同じ学生） ※複数回答可
⑨ 学部以外（全学組織等）が提供している初年次ゼミで、学部の学生が履修できる科目の有無	☐ 有 → ☐ 学部全員が必修 ☐ 選択科目 ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 無	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小）

【A-4】専門ゼミについて

1. 1年次に配当されている専門ゼミ、演習、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	[]学部全員必修科目 →[]前期開講 []後期開講 []選択科目 []学科により必修科目 (右の追加質問へ) []設定していない ⇒ (7頁に移って下さい)	[]学部学生の 70%以上が履修 (カバー率大) []学部学生の 30%～70%が履修 (カバー率中) []学部学生の 30%未満が履修 (カバー率小) ※選択ゼミや学科必修ゼミを履修する学生の合計が、1 学年の学部学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
③ ディベート ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど) ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生のうちの何%かでお答えください。	[] 100%の学生が経験する [] 30%以上 70%未満の学生が経験する [] 教育課題としているが把握していない	[] 70%以上 100%未満の学生が経験する [] 30%未満の学生が経験する [] 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 1年後期に配当されている場合、その科目は前の期のゼミ・演習・アクティブ科目の履修を前提としていますか。	[]履修を前提としている →[]テーマ (内容) []能力 (スキル・知識) []人間関係 (同じ教員) []人間関係 (同じ学生) ※複数回答可 ⇒ (右の追加質問へ) []履修を前提としていない	その科目名は何ですか。 [] [] [] 前の期の科目名は何ですか。 [] [] []

2. 2年次に配当されている専門ゼミ、演習、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学部全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ☐ 学科により必修科目 } (右の追加質問へ) ☐ 設定していない ⇒ (8頁に移って下さい)	☐ 学部学生の 70%以上が履修 (カバー率大) ☐ 学部学生の 30%～70%が履修 (カバー率中) ☐ 学部学生の 30%未満が履修 (カバー率小) ※選択ゼミや学科必修ゼミを履修する学生の合計が、1 学年の学部学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ デイバート ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど) ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ (内容) ☐ 能力 (スキル・知識) ☐ 人間関係 (同 ^{教員}) ☐ 人間関係 (同 ^{学生}) ※複数回答可 ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 無	その科目名は何ですか。 [] [] [] [] 前の期の科目名は何ですか。 [] [] []

3. 3年次に配当されている専門ゼミ、演習、アクティブ科目についてお訊きします。

※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学部全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ☐ 学科により必修科目 } (右の追加質問へ) ☐ 設定していない ⇒ (9頁に移って下さい)	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※選択ゼミや学科必修ゼミを履修する学生の合計が、1 学年の学部学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ デベート ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど) ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（ 同じ教員 ） ☐ 人間関係（ 同じ学生 ） ※複数回答可 ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 無	その科目名は何ですか。 [] [] [] [] 前の期の科目名は何ですか。 [] [] []

4. 4年次に配当されている専門ゼミ、演習、卒論ゼミ、アクティブ科目についてお訊きします。

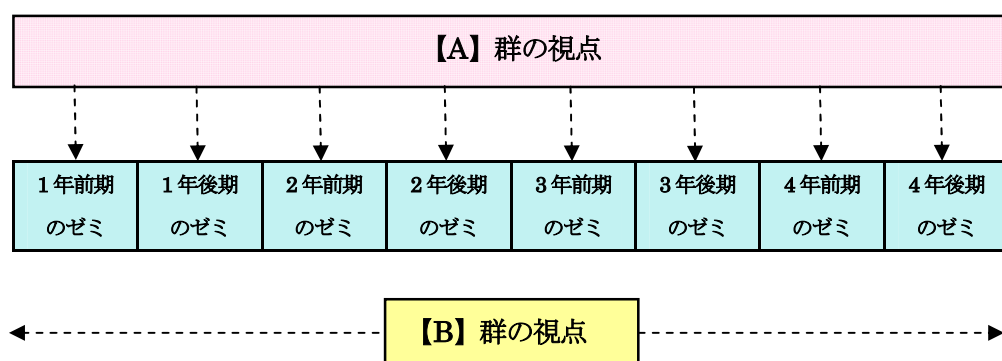
※1 教養科目の語学科目、体育科目、情報系科目は除きます。

※2 履修学年の指定がない場合は、選択科目として回答してください。

項 目	主 質 問	追加質問
設定状況（必修か、選択か）※複数科目ある場合は複数回答 設定している場合は以下①～⑨にお答えください。	☐ 学部全員必修科目 → ☐ 前期開講 ☐ 後期開講 ☐ 選択科目 ☐ 学科により必修科目 } (右の追加質問へ) ☐ 設定していない ⇒ (10 頁に移って下さい)	☐ 学部学生の 70%以上が履修（カバー率大） ☐ 学部学生の 30%～70%が履修（カバー率中） ☐ 学部学生の 30%未満が履修（カバー率小） ※選択ゼミや学科必修ゼミを履修する学生の合計が、1 学年の学部学生数に占める割合で回答してください。
① この学年次に専門ゼミ・演習・アクティブ科目を配当しているカリキュラム設計上の狙い、設計の特長（自由記述）	[狙い・特長]	
② グループ学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
③ デイバート ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
④ フィールドワーク ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑤ プレゼンテーション ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑥ レポート提出 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑦ ふり返しシート (学習の記録・ポートフォリオなど) ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑧ 授業時間外学習 ※ 複数のゼミ・演習・アクティブ科目がある場合、それらの全部の科目を通じ、この学年に在籍する学部学生の中の何%かでお答えください。	☐ 100%の学生が経験する ☐ 30%以上 70%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としているが把握していない	☐ 70%以上 100%未満の学生が経験する ☐ 30%未満の学生が経験する ☐ 教育課題としていない
⑨ ゼミの連続性 ※ 前の学期に配当されているゼミ・演習・アクティブ科目の履修を前提としている科目の有無	☐ 有 → ☐ テーマ（内容） ☐ 能力（スキル・知識） ☐ 人間関係（ 同じ教員 ） ☐ 人間関係（ 同じ学生 ） ※複数回答可 ⇒ (右の追加質問へ) ☐ 無	その科目名は何ですか。 [] [] [] [] 前の期の科目名は何ですか。 [] [] []

【B】の質問群

ここからは【B】の質問群に移ります。ここでは4年間の学士課程教育を通して、ゼミ・演習・アクティブ科目がどのように行われているか、という視点から質問します。



【B-1】複数セメスターで連続しているプログラムゼミの設定状況

共通テキストおよび共通プログラムによって複数クラスで、複数セメスターにまたがって展開されるプログラムゼミについてお答えください。

- ※1 初年次ゼミと教養科目の語学科目、情報科目、体育科目は除きます。
- ※2 キャリアセンター等が提供する正課ではないキャリア教育については除きます。
- ※3 「履修モデル」や制度上の「専攻」「コース」は除きます。

[プログラムゼミの概念図]

<パターン①>

セメスター		前期	後期
プログラム ゼミA	クラスA-1 (25人)	→	→
	クラスA-2 (25人)	→	→

複数セメスターにわたって、複数のクラスで、共通テキストに基づいて進行するプログラムゼミのパターン

<パターン②>

セメスター	前 期		後 期	
プログラム ゼミB	クラスBI-1 (25人)	→	クラスBII-1 (25人)	
	クラスBI-2 (25人)	→		
				→

複数セメスターにわたって共通テキストに基づいて進行されるゼミであるが、セメスターが進むごとにクラス数が減り、受講生が絞られていくプログラムゼミのパターン

1. 設定の有無

[]設定されている

→[]必修 []選択 ※複数選択可 ⇒ (その内容を11頁の表に記入して下さい)

[]設定されていない ⇒ (【B-2】へ)

2. プログラムゼミの内容

<回答欄①>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の 意図			
このプログラムにおいて獲得すべ き能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たりの人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

<回答欄②>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の 意図			
このプログラムにおいて獲得すべ き能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たりの人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

<回答欄③>

名称または科目名		必修／選択区分 ※複数選択可	[]必修 []選択
設計上の目的および配置の 意図			
このプログラムにおいて獲得すべ き能力（スキル・知識・態度）			
取り組むテーマ（内容）			
配当学年・セメスター ・履修人数	[]年[]期（履修人数[]人）→[]年[]期（履修人数[]人）		
1クラス当たりの人数	[]30人以下 []31～50人 []51～100人 []101～200人 []201人以上		

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【B-2】講義科目とゼミ・演習・アクティブ科目が有機的に組み合わされている科目の設定状況

講義科目は知識の集積を目的とし、ゼミ・演習・アクティブ科目は知識の定着や活用知・実践知への転換を目的として、日本では通常は別々の科目として行われています。この講義科目とゼミ・演習・アクティブ科目を有機的に結び付ける取り組みについてお聞きます。

同じ期に開講される同一教員による 2 つの科目で、1 つの科目では講義が、もう 1 つの科目ではゼミ・演習・アクティブ科目、またはアクティブラーニングが行われ、履修する場合は必ず両科目をセットで履修することが求められる科目が設定されているでしょうか。

＜講義と演習が組み合わされた科目設定の例＞

時限	月曜日	火曜日
1 時限	D 概論 (河合教授)	
2 時限		E 演習 (河合教授)
注) D 概論と E 演習は必ず同時履修すること。		

※ ただし、以下はゼミ、演習、アクティブ科目およびアクティブラーニングには含めません。

- ・インターンシップ
- ・ドリル等を用いた解法・技法など、個人のトレーニングのみを目的としたもの

1. 設定の有無

[]設定されている

[]設定されていない $\Rightarrow$ (**【B-3】** $\sim$)

2. 組み合わせ履修科目の内容

		組み合わせ科目①	組み合わせ科目②	組み合わせ科目③
科目名				
必修／選択区分		[]必修 []選択	[]必修 []選択	[]必修 []選択
履修人数	30人以下			
	31人～50人			
	51人～100人			
	101人～200人			
	201人以上			
配当学年・セメスター		[]年[]期	[]年[]期	[]年[]期
取り組むテーマ (内容)				
講義と討議・ゼミ（演習）の比率 ※合計10になるように		:	:	:

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【B-3】ゼミ・演習・アクティブ科目の外部への開放性および、外部との連携状況

ゼミや演習などが、1人の教員のもとに閉じられていて外部から内容が検証できなくなっていたり、社会や外部との接点を設けないことによる弊害が指摘されることがあります。外部への開放性や連携についてお伺いします。

※個々の教員の裁量で行われているのではなく、学部・学科のカリキュラム設計として取り組まれていることについてご回答ください。

1. 他のゼミとの共同ゼミ・合同ゼミについて

☐ 行っている ☐ 行っていない

→ ☐ 他大学のゼミとの共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 他学部との共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 他学科との共同ゼミ・合同ゼミ

☐ 学科内の共同ゼミ・合同ゼミ

2. 運営の問題として解決すべきテーマを外部（企業、自治体、NPO、学会等）と連携することで得て、成果をプレゼンテーションしている科目

1) 有無について

☐ ある ☐ ない ⇒ **【B-4】** へ)

2) 「ある」場合には、その科目について以下の表にご記入下さい。

※ 履修者数を数字で回答、テーマを得ている先およびプレゼンテーション先を「○」で回答して下さい。

科目名	履修者数 (人)	どんな組織との連携でテーマを得て					成果をどこにプレゼンテーションしているか				
		企 業	自治体	NPO	学 会	その他	企 業	自治体	NPO	学 会	その他

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

3. その成果をプレゼンテーション大会や学会発表等に参加する科目

「2.」で回答された科目のうち、学内でのプレゼンテーション大会、研究発表会等への発表が必須化されている科目

※ 卒論発表会等の卒業論文に関するものは除きます。

1) 有無について

☐ 有る ☐ ない ⇒ **【B-4】** へ)

2) 「ある」場合には、その科目について以下の表にご記入下さい。

科目名	履修者数 (人)	参加発表会名	外部評価委員の有無 (「○」で回答)	発表会後の学外の大会等への参加の有無 (「○」で回答)

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【B-4】 卒業論文について

1. 必須の有無

☐ 全員必須とされている

→ ☐ 最低限の量の規定がある → その量は 以上

☐ 量の規定はない

☐ 必須とされていない

→ 学部 1 学年の学生数を母数として、卒業論文を執筆する学生の割合は

☐ 30%未満 ☐ 30%以上 70%未満 ☐ 70%以上

→ 必須とされていない理由 ※自由記述をお願いします

2. 審査体制について

☐ 複数教員による審査が行われる

☐ 担当教員のみ審査が行われる

3. 審査（評価）基準について

明文化された審査（評価）基準チェックシートが ☐ 有る ☐ ない

4. 発表会の有無

- []卒論発表会が行われている
→[]全員の口頭発表がある
→[]卒論発表会での発表が成績に反映される
[]卒論発表会での発表は成績に反映さない
[]全員参加のポスターセッションがある
[]優秀論文の発表会がある
[]卒論発表会は行われていない

【B-5】個別教員による進んだ取り組み

本質問紙では、学部・学科としての設計をお訊きしてきましたが、ここでは個々の教員の裁量による取り組みとして、特に成果を挙げている特色あるゼミ・演習・アクティブ科目がありましたらお答えください。

科目名	配当学年	担当教員名	特徴（自由記述）

※ 回答欄が足りない場合には当頁をコピーして記入の上、アンケート用紙に添付して下さい。

【B-6】本調査についてのご意見

当調査についてのご意見などがございましたらご記入ください。今後の調査に反映させていただきます。また、報告書等へも掲載させていただく場合がございます。

■2010 年度の貴学部についてお答えください

大学名_____ 学部名_____

学部の 1 年生の定員_____人 学部設置年度（西暦_____年度）

■ご回答くださった方についてお答えください

ご回答者	所属 役職		(フリガナ) お名前	()
ご連絡先	TEL		e-mail	
	FAX			
	住所	〒		

※ ご記入いただいた個人情報は、ご回答内容に関する問い合わせ、及び、調査報告書の発送、及び、今回調査報告に関する案内のためのみに使用いたします。

ご協力ありがとうございました。

2010 年度 大学のアクティブラーニング調査報告書(要約版)

2011 年2月

学校法人 河合塾 教育研究部

(東京) 〒171-0022 東京都豊島区南池袋 2-49-7

池袋パークビル 6階

電話 03-6811-5531

(大阪) 〒531-0072 大阪府大阪市北区豊崎 3-14-4

河合塾セルスタ 6階

電話 06-6372-6356
